
勇者ですか？ いいえ、過負荷です

紅の雲雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者ですか？ いいえ、過負荷です

【Nコード】

N8213U

【作者名】

紅の雲雀

【あらすじ】

この作品は「めだかボックス」の設定を使わせてもらっています。

目を覚ましたらそこは異世界で

俺は勇者になつてて

魔王退治をすることになって

俺は過負荷なんだけど……

最初は無力な才能で（前書き）

おっひさしぶりでーす

久しぶりの更新ですねー

いやーねー

いろいろ悩んでたんですよ

この作品をupするの？とかね

まーいつもどおりの駄文ですが
よろしくです

最初は無力な才能で

昔の夢を見た。

まだ幼く無邪気だった頃の。

昔、夢見た理想は、今じゃ無理だと決めつけた幻想。

昔の俺は“諦める”ことを知らなかった。

だから“頑張る”ことしか出来なかった。

でも今じゃ現実を見て“諦める”ことを覚えた。

その代償なのか“頑張る”ことを忘れた。

全て“諦めた”で終わらせ。

全て“面倒くさい”で逃げる。

俺はいつからそんな人間になったのだろう。

小学校高学年。

俺は仮面をつけはじめた。

嘘という名の仮面を。

作り笑いで“良い人”を演じるようになった。

そうすればみんな仲良しでいられるから。

問題にはならないから。

仮面をつけた生活は続いた。

中学2年生の中盤。

事件が起こった。

『お前の作り笑いが気にいらねんだよぉ!!』

俺の作り笑いがバレた。

『面倒くさい人だね。みんな笑っていればいいじゃないか。作り笑いだっていいだろ？ 君は“みんな仲良し”なんて幻想を抱いているのかい？ それは間違ってる。そんな幻想無理だ。絶対一人は作り笑いで“良い人”演じてる。俺みたいだね』

彼は俺の胸ぐらを掴んできた。

そこから覚えてない。

たしか彼が俺にたいして何かを言うてきた。

その後で俺の“過負荷”が發動した。

そして現在。

「黒神。俺を改心させるって本当？」

「ええ」

「それは無理な話だよ。とつと諦めたほうがいいよ?」

「では諦めることを諦めます」

「そう……面倒くさい」

「桜島3年生！ 貴方の才能でこの学園を良くしてください」

「それは無理な話。そして俺の過負荷は良い学園生活を送るには必

「要ないしね」

「では、力ずくで……」

黒神めだかが俺のところへ突っ込んできた。

その後のことは覚えてない。

たしか倒れた？

いや、痛みを感じてない……。

感じる前に倒れたのか？

まったく現状が分かってない。

とりあえず目を開けてみるか……。

.....

ああ、確かに僕たちはグラウンドで戦ったさ。

だからってな……。

[illegible]

!!!

俺の目には広い土地しか見えなかった。

「何をどうしたらこうなるんだよ……」

ため息をつくしかできないこの状況。

俺は何が起こってるのか、まったく理解ができなかった。

「……あの」

「まったくすればいいんだよ。」

「……聞こえてますか？」

「あー早く家に帰りたい。」

「……返事をしてくれると助かります」

「全てがだりーよ、考えるのもめんどいよ。」

「聞こえてますか！」

「ん？」

「今まで気づかなかったけどそこには少女がいた。」

「俺より年下かな？」

「何か用？ 俺は今大変な状況で困ってるんだ」

「はう……すみません……」

「少女は謝り静かになった。」

「あ、そうそう。質問いいかな」

「はい、何でもどうぞ」

「じゃあ、ここってどこ？」

「ここですか？ ここはアクアですよ？」

「アクア？」

「聞いたことがない土地だ。」

「俺が知らないだけか？」

「それって日本？」

「にっぽんですか……？」

「あれ？ じゃあ、ここは日本じゃないのかな？」

「まあ、いいや。で、何で君は俺に話しかけたの？」

「それは……」

「それは？」

「笑いませんか？」

「ああ、笑わない」

「伝説……まあ、噂なんです。『光に導かれた勇者が現る』そんな

な噂がアクアで広まってるんです」

勇者？

RPG 何かか？

「それでついさっき一筋の光がここに落ちてきたんです。それが貴方です」

わー、俺が勇者？

「ざっけんなあー!!」

「はう!？」

「ああ、すまん。で、俺がその勇者だと？ それでこの世界には魔王がいて僕がそれを倒すのか？」

「凄いですね……」

やれやれ……僕はベタなRPGの世界に来たのか……。

「でも残念ながら、俺には勇者の素質なんてないよ」
だって過負荷^{マイナス}だからね。

「でも噂……」

「所詮噂、俺が勇者だっていう証拠はないでしょ？ 諦めは肝心だよ」

「でも貴方が光と共に来たのは事実です。私はこの目でしっかり見ましたから」

「だから」

俺は話そうとしたら、足音がした。

一人じゃない数人……いや数十人の。

「「勇者さまだあああああ!!!!」」

「（ビクっ!）」

彼女はビククリしたのか体をビクつかせた。

「野郎ども、勇者様を街まで案内しろ!」

「「はっ! イエッサー!!」」

「何だ!? 何をするつもりだ!」

俺は男共に捕まってしまった。

「これから勇者様をお城まで連れて行くんですよ」

「はあ！？何を言っているんだこいつ等は！

「うわあああああー！」

俺は抵抗することが出来ず、連れて行かれた。

「あ、勇者様……お名前を聞けませんでした……」

「手荒な手段で連れて来てしまつてすまん。ワシがこのアクアの王様じゃ」

RPGにいそうな王様だ。

冠をかぶり、赤いマントみたいな物を身につけ、白いひげだ。

「さつそくで悪いんじやが。魔王退治をしてくれないかのう」

「……何を言つてる糞ジジイ」

「貴様こそ何を言っている！」

「まあ、落ち着くのじゃ。いきなりの事で戸惑っているじやろつ。

答えは明日でよい。今日はここに泊まっていきなされ」

俺を無視して話を進んだ。

ああ、RPGの主人公もこんな感じなのだろうな。

「豪華なのな」

そこにはテレビや漫画でしか見たことがない料理フルコースがあつた。

「遠慮なく食べてくれ」

遠慮も何もこんなに食べねえよ……。

いったい何人前だ……？

「ちなみに魔王退治をしてくれるのなら、こつという暮らしを約束するぞい」

悪くないかも、って思ってる自分もいるけど。

俺には魔王を倒す術がない。

もちろん勝つ術だって。

俺は過負荷^{マイナス}、勝てるわけがない。

そもそも勝つのはとうの昔に諦めた。

「王様よ。俺一人で戦うのか？」

「いや、もちろん仲間の手配しておる」

「ほー、それは使えるんだろうな」

「もちろんじゃ」

「じゃあ俺の代わりにそいつ等を行かせな」

「それは無理じゃ、勇者であるお主が行かねば魔王は倒せぬ」

「だから俺は勇者って呼ばれるほど凄いやつじゃない。それに一人で状況が良くなるんだったら、俺は神か何かか？」

「そうじゃな。お主は神に選ばれし者」

「じゃあその神の目は節穴だらけだ。眼科に行くことをお勧めするぜ」

「でも挑戦するだけ挑戦したらどうかのう？」

「残念ながら命が惜しいのでね」

「お主は偉いよ」

王様はいきなりしんみりした。

しんみりっていうか真面目になった。

「前に呼び出された勇者は選ばれただけで浮かれ、魔王の前では一撃で死んだ」

「それじゃソイツを選んだ神はクソだな。っつーことで俺も一撃で死ぬと思うぞ？」

「でも君は落ち着いている」

「ただ状況が飲み込めないだけだ。いきなり異世界に連れてこられて」

「むう。異世界とな」

「？ 何が気になるんだ？」

「君は異世界から来たと言ったな」

「ああ、言ったな」

「！？ 例外じゃ。普通はこの世界の住人で勇者が決まるのに。お主は異世界から…… 異例じゃ。もしか本物の勇者かもしれん」

…… 異世界から来るっていうほうが王道だけだな。

「お願いじゃ！ 魔王を倒してくれ！」

おいおい…… 土下座ですか？

仕方ない諦めるか……。

「おい、顔を上げる」

「それじゃあ」

「条件がある」

「叶えられるなら」

「まあ、仲間だな。それと僕に防具、それと武器をくれ。丈夫で強いやつ。それと書斎みたいなのはるか？ この世界の情報がいっぱい書いてある」

「ああ、それだけでいいのか？」

「もちろんだ。まあ、勝ったあかつきには金とかも貰う」

「それぐらいお安い御用じゃ！」

「交渉成立……」

「じゃあ、俺はここに引きこもるから、魔王退治は数日後ってことで」

俺はさっそく書斎に入った。

この世界のことを調べるために。

まずは……この本か。

えーと『勇者になるための本』。

……………これはいいや。

次々…………『魔王の倒し方攻略本』

これで倒せたら勇者はいりません。

「これだ」

『子供が学ぶ歴史』

これだっ たらこの世界に来た僕でも理解は出来るだろう。

この世界は三つの勢力がある。

その三つの勢力はよく争っていた。

その争いの中で生まれたのが“魔法”や“魔術”。

そういった、まか不思議な能力だ。

その不思議な能力が生み出されたと同時に“魔物”が発生した。
いったいどこから現れたのか。

今でも不明。

でも“魔王”と呼ばれる者が引き連れてることだけは判明。
今では三つの勢力が手を組み魔王退治をしている。

大まかに読んだけど、大体のことは分かった。

……………男の子なら分かってるよね。

魔法か。

使いて。

めっちゃ使いて。

俺は本を読み終わると同時に王様のところへ向かっていた。

「（バンッ！）」

ドアを豪快に開け王様を呼ぶ。

「な、何事か!？」

「いや、大した用事じゃないけど。一つ頼み事がある」

王様と話していたのだろうか女性3人が僕を見てる。

そのうち一人は見たことがあるような……まあ、いっか。

「王様を俺に魔法を教えてくれ」

「魔法とな？ まあ、いいじゃろ。お主の世界には無かったのかのう？」

「ああ、なかった」

「まあ、落ち着くのじゃ」

何を落ち着けというのだ。

魔法が、魔法が使えるって男の子の夢だぞ。

俺はずっと前に諦めてた……というか現実を見て魔法なんてないって決めつけたけど、この世界にはあるんだぞ！

落ち着けるか！

「その前に自己紹介じゃ」

「ん？」

「私ミラン・グリフォードです。以後よろしく」

「??? あー、よろしくお願いします」

なぜ敬語になったのかは置いて、凄い美人さんだ。

モデル体系とでも言うのだろうか？

長い黒髪も似合ってる。

それでいて殺気を放ってる。

たぶんこれのせいで敬語になったのだろう。

「わ、私セイリア・イーセスです。よ、よろしくおねがいしまふつ。

あ、噛んじやいました……」

こちらは結構背が低めの優しそうな女の子。
ん……。

「会ったことある？」

「え！？ 忘れたんですか？」

「ああ、物覚えが悪いからね」

「ほら、昨日草原で話したじゃないですか！」

あー、はいはい。

思い出した。

「最初に俺を勇者って言った子が」

「最初か分かりませんが、たぶんそうです」

ほー、あの子か。

「ねえねえ、ボクだけ自己紹介をさせないのかな？」

「あ、ごめん」

「いいよ、ボクの名前はエミリア・セシル。一応男だからよろしくね」

「……………」

「……………」

「……………」

ボクとセイリアもちろんミランを含む三人は黙り込んでしまった。
そしてミランから感じてたオーラはまったくくない。

「「おとこ？」」「」

「それがどうかしたかな？」

たぶん俺達一緒のことを考えてるね。

「ま、まあ、よろしく」

「男同士よろしく」

顔はどう見ても女の子。

背はセイリアと同じくらい…………。

男の娘…………？

「まあ、脱線したけど。魔法教えてくれっ！」

「教えるとしてもワシじゃなくて、彼女達じゃよ」

「へっ？」

「魔王退治のメンバーじゃよ」

つつーことらしいです。

他人事みたいに言うな？

いやいや、他人事だし。

だって俺役に立たないし。

全て三人任せろし。

「じゃあ使えない勇者ですが、よろしくお願いします」
マジで使えないから本気で頭を下げる。

「いやいや、そんな謙遜されなくても」

セイ（セイリア）がフオローしてきた。

「残念ながら俺は魔法すら使えないんだ」

「で、でも……」

「ちなみに元の世界でも勝ったことなんて一度も無い」

「あのう、王様」

「何じゃ？」

「本当に勇者はこの人なのでしょうか？」

「勇者じゃよ、ワシの直感がそう言っておる」

「そうですか……」

「いやいや、本当は勇者様強いんですよ？ 魔法抜きで」

「魔法を抜いても俺は弱いぞ？ 犬にも勝てないからな」

「勇者様ひ弱です……」

「あ、勇者様とかお堅いのなしね」

「じゃー、って名前は？」

「あ、そういえ自己紹介してなかったな。俺の名前は桜島幸路」

「さくらいゆきじ？ 珍しい名前だね」

「そうか俺達の世界じゃ普通だけだな」

「じゃあユークンよろしく」

「そのユークンって俺のことかな？」

「ちなみにセイリアはセーちゃん、ミランはミーちゃん」

「ゆ、幸路さん、よろしくお願いします」

「では、私は幸路様とお呼びしますね」

「結局さまは付けるんだね」

あ、そうそう。

「じゃあ、さつそく魔法を覚えてくれ！」

「ええ、いいですけど。私は教えることが出来ないのですこちらのセイリアに聞いたほうがいいですよ」

「ボクも教えるのは無理かな？」

「わ、私ですか？ 自身がありません……」

「大丈夫だよ、自身を持つて」

勇気をつけさせるためセイの頭を撫でた。

「はう……」

何かセイって妹って感じがする。

んでミランが姉。

エミ（エミリア）は……弟？ 妹？ どっちだ？

「魔法は簡単ですよ。だからこの世界の人なら無意識に魔法を使うことが可能ですね。幸路さんにとって難しいか分かりませんが」
あれか？

日本人が日本語を覚える。

でも途中から英語を覚えようとすると難しい、みたいな？
ちなみに俺は英語が凄く苦手だ。

「まあ、最初は基礎魔法を勉強しましょう」

「？ 勉強すれば使えるの？」

「まあ、そうですね。頭で理解しちやえば簡単です」

「んで、この本を読めばいいと？」

「そうです」

むう……何でこの世界の文字が日本語なのか？
そういうツツコミは止めておこう。

まず目に入っただのは『炎弾』『水弾』『雷弾』。

まあ、そんな“何か”を打ち出す魔法。

あとは『回復』『攻撃力強化』『防御力強化』。
補強能力だな。

ちなみに無意識で回復する能力もあるらしい。

んー、何を覚えよう。

「なあセイ」

「ふえ？ セイって私のことですか？」

「ああ、オススメの能力つてあるか？」

「オススメですか……これなんてどうです？ 初心者でも簡単に覚えられますよ」

「じゃあこれを練習しようかな」

「あ、あのう」

「ん？」

「これプレゼントです……」

顔を赤くして、もじもじしながら俺に渡してきた。

……石？

「それは魔法石ですね。自分の魔力を倍増するための石です。よい物だと200万とかしますよ」

「ほー、ありがとうございます」

「はう……」

ありがとうの印に頭を撫でた。

「炎の玉のイメージ……」

イメージ……イメージ……。

……………。

「イメージ出来んっ！」

「はうっ！」

「あ、ごめん」

「いやいや、よかったらお手本を見せましょうか？」

「ああ、本物を見せてもらったほうがイメージしやすい」

セイは杖を持って立ち上がった。

「ん？ 杖つて必要かな？」

「いえ、私は魔法や魔術を専門とする魔術師ですから。剣とか苦手なんですよね」

魔法や魔術ね……。

って魔法と魔術ってどう違うんだ？

まあ、その話はいいや。

「それで魔力をあげる杖を使ってるんですよ」

「ふん」

俺って何の武器を使うのだろう？

「じゃあやりますよ、見ててくださいね」

そういうとセイは前を向き、手を前へ突き出した。

次の瞬間、炎の弾が一瞬にしてできた。

「このような炎をイメージして……次は飛んでいくイメージです」
すると炎の弾は遠くまで飛んでいった。

「こんな感じで大丈夫ですか？」

「おおー」

俺は拍手をする。

生魔法だぜ……。

カッコいいね！

「じゃあ俺だね」

イメージ。

さっきのセイのイメージだ。

全てを燃やす紅蓮の炎。

「！」

でた！

サイズはセイより小さく、手のひらサイズ。

でも感激だ！

「お、呑み込みが早いですね。流石幸路さんです」

今日は『炎弾』『水弾』『無意識自然回復』『攻撃力強化』。

炎弾・水弾は手のひらサイズだけど使えるようになった。

無意識自然回復は、まあ、無意識的に自然回復するって魔法だね。
まだ意識的には無理だ。

次の日。

魔法の勉強をした俺はミランとエミと一緒に武器を選んだ。

「んー、俺ってどの武器も使ったこと無いんだよね」

因みに帰宅部です。

竹刀なんて触ったこともありません。

あるのは修学旅行で買った木刀ぐらい。

「ミランとエミって何の武器を使ってるの？」

「私ですか？ 私は二つの剣です」

「ボクはねーこれだよ」

エミが手にしているのは小刀と手裏剣数個とクナイ数個。

「ボクが得意とする魔法は“加速”だからね」

「ほー」

加速だから小回りがきく小刀ね。

「まるで忍者だな」

「にんじゃ？ 何それ？」

「私も知りませんね……」

「ん。忍者ってのは俺の世界の隠密行動を主体とする集団かな？」

まあ昔の話だけど

「でもボクは隠密行動なんて苦手だけどね」

何となくは分かってたけどね。

「それで幸路様はどの武器にするのですか？」

「んー迷う……」

「まあ、単純に剣という選択もありますが」

「単純に剣か……」

RPGとかでも主人公は剣だけだよ……ここは違う物を選びたいよね。

とりあえず剣を手にとってみた。

「重っ……」

残念ながらこの重さの物で戦うことが出来ません。

「じゃあこれなんてどうですか？」

ん……銃？

「まあ、ひとまずこれでいいかな？ 使い方を教えて」

「簡単ですよ。この銃に魔力を注げばいいだけです」

「んじゃー試し撃ち」

そこにある大きな壁に銃口を向ける。

「魔力を注ぐと……」

魔力が銃に吸い取られる感覚。

「（ズガンッ！）」

「（メキメキ……）」

「……………」

「何で二人とも黙ってるの？」

「い、いや。この壁は頑丈な魔法石で造られてるんですよ。だから魔力を使った攻撃で壁にひびを入れるのは難しいんですよ。できるのはセイリアぐらいですね」

ん、セイ？

「セイって凄いやつなの？」

「ええ、結構な有名人です。魔法を操る人たちの中で最高ランク。

いわば最強ですね」

「マジですか……」

「では魔王退治に行つて来ておくれ」

ここで過ごして二週間。

そんな短い間に修行をして魔王退治。

この世界の魔王は二週間修行すれば倒せる雑魚か？

「んじゃ、いつちよ逝ってくる」

「逝くんじゃないぞ」

そんな会話を済ませ、魔王のいる何とか城に乗り込む。

いや、歩いて三十分って何だよ……。

しかも二週間襲ってこないって……。

本当に魔王か？

そんな疑問がずっと頭の中でループしてた。

「この魔王はバカですが力は強いです。油断しないでくださいね。幸路様」

「ああ……」

やっぱりバカなのね。

予想通りなのか、お城の門には武装した門番が二体いた。

「いや、あちらさんもやる気満々だね」

「じゃあ、ここはボクと」

「私にお任せください」

エミとミランが前へ出た。

「ボクの速さについてこられるかな？」

小刀を構えたエミは加速を開始した。

門番はエミの身長を超える大斧を真正面に振り下ろした。

エミはそれを高速で避け、門番の後ろに回り、背中を小刀で刺す。

「ボクに背中を向けたら終わりだからね」

わー、可愛い(?)のに残酷だ！

つつても、この状況そんな事は言ってられないんだよね。

一方ミランはもう一体の門番の相手をしてた。

ミランは正々堂々と真ん前から攻めてた。

ミランは『攻撃力強化』で自分の攻撃力を高め門番と戦っていた。大きな斧を片方の剣で防ぎ、もう一つの剣で門番の眉間を刺した。

「敵に容赦ないね。ミラン」

「ええ」

「それじゃあ、セイ。扉を派手にぶっ壊して」

「は、派手ですか？ ……了解です」

セイは杖から物凄い炎をだして扉を壊した。
そして城に入って、とりあえず一言。

「勇者様御一行です。魔王を殺しに来ました」

一応宣戦布告。

相手の家に入るときは挨拶をしなくちゃね。

「ちょ、幸路さんっ！ 何を言ってるんですかつ！」

「んゝ、でもボクはこういうの好きだな」

「私はどちらで構いません。どうせ後で気づかれるのですから」

「じゃ、とりあえず乱闘開始っ！ ことで。みんな頑張って勝ってね。俺は頑張って負けるから」

「やあ、魔王」

「何だい？ 勇者」

「一応感想として。人間なんだな」

「いや、僕は魔物だ。人間の姿を借りているだけだよ」

「そーなの」

絶対に瞬きを許されない。

した瞬間、相手の攻撃が飛んできて死ぬかもしれないから。

まあ、俺が勝つ可能性は0%に等しいんだけど。

「魔王」

「何だ？」

「お前に質問だが。俺は何に見える？」

「勇者に見える」

そうですか……。

「お前の目は節穴だ。一回めんたま引っこ抜いたらどうだ？」

「最近の勇者は汚い言葉を発するんだな」

「残念ながら綺麗ごとだけを並べても勝てないのでね」

「現実を見ているんだな」

「いや。俺は現実から逃げてるんだ」

「ほー、勇者らしくない」

「そうさ、俺は勇者らしくない。だから俺は勇者じゃない」

「では、何だと言っただ？」

「“過負荷”とでも言っておこうか」

「では過負荷よ。僕の力の前でひれ伏すがよい」

黒くて黒くて黒い真っ黒な弾。

「なあ魔王」

「怖気づいて、命乞いか？」

「ん、いや諦めたんだよ」

「む、何をだ？」

「お前を自分の力で倒すことを」

「ほほー、他力本願か？」

「いや、それとは違う。俺の過負荷^{スキル}を使わせてもらう」

「スキルだと……？ 残念ながら魔法なら聞かない！」

魔王は黒い弾を俺に向かって撃った。

無理^{あきめ}無力

俺の過負荷は“無理無力”。

相手のやる気無くさせる、絶望させるなどの効果がある。

中学二年生のときに発動した二つ目の才能。

そして初めての過負荷^{スキル}

「これ以上やるつもり」

「いいえ……諦めた。お前に勝てない……」

「それじゃあ死んでよ」

銃口を魔王の頭に向け。

重いはずの引き金が、軽く感じた。

「いやー！ 流石勇者様！ 魔王を独りで殺してしまうなんて！」

「本当ですよ。幸路さんどんな技を使ったんですか？」

「んー、内緒だよ」

「ボクも気になるなー」

「私も気になります」

内緒にする理由はないけど、一応内緒ってことにしておく。
んで、流れだと、魔王を倒して、元の世界に返れる。
ってというのが流れのはず。

「それじゃあ、残りの魔王もよろしく頼みますぞい。勇者様」

……………ハア？

「What？」

「因みに勇者様のお城は立てたぞい。だから今日からそちらで住んでくれても構わん。使用人もつけたぞい」

「どうやらこの世界には魔王が何体もいるらしいです。」

「それじゃあ、ボク達もその城で暮らすのかな？」

「そうじゃのう……まあ、それが一番じゃろうな」

「つーことで、その城には俺・ミラン・セイ・エミ住むことになりました。」

残念ながら俺が思ったとおりには行かないね……。

最初は無力な才能で（後書き）

http://profile.ameba.jp/kurena_inohibari/

アメンバー始めました！

一応毎日更新中！

こっちでは140字小説ばかり書いてます

気軽にアメンバー申請送ってね？

修行のあとはご褒美の

「次こそっ！」

走り出し、両手で握り締めた木刀を前に振る。

その一太刀をミランが軽々と受け流す。

「まだまだっ！」

体制を立て直し、横へ木刀を振る。

ミランは片方の木刀でそれを止め、片方で俺の頭を狙う。

俺はそれをギリギリのところであわして、後ろへ下がった。

「ハアハア……」

息が乱れてる。

そりゃ一時間以上ミランと修行をしているのだから。

今している修行は剣術だ。

ちよくちよく休みながら修行をしてるが、すぐに息が乱れてしま
う。

それに今まで俺の攻撃はミランに当たってない。

一週間前から。

「幸路様！ 集中です！」

ミラン師匠からの喝。

集中……。

少しずつ息を整える。

「はあっ！」

渾身の一太刀。

でもミランは軽々と避けた。

そしてミランが俺の背後に回り、俺の首に木刀を当てる。

「参りました……」

ミランが俺の首に木刀を当てるということは修行終了の知らせだ。
つまり俺の負け。

「一週間前まで木刀すら触らなかった幸路様ですよ。これだけでき

れば上等です」

「お世辞ありがとうございます」

「ゆ、幸路さん。お疲れ様です」

「疲れ」

セイとエミが来た。

そしてセイが俺にタオルを差し出した。

「ありがとう、セイ」

「い、いえ……」

何か恥ずかしがっているセイを見てると頭を撫でたくなる。

これは妹を見る兄の気分か？

「ボクからはこれ」

「お、水か。エミもありがとうな」

「ボクもなでなで」

「はいはい」

この男から女が分からん性別のエミの頭を撫でる。

仕草は女の子っぽいのだが……どっちなんだ？

「こ、これミランさんの分です」

「あ、私の分まで用意してくれたんですね。ありがとうございます」

「もちろんボクも持ってきたんだからね」

ミランにもタオルと水を渡した。

「ふゝ、疲れたー。午後からは魔法か？」

「あ、はい。今日は『回復』が意識的に出来るようになりますよ」

「了解。セイリア師匠」

「師匠なんて……」

また顔を赤くして下を向いてしまった。

「ねえねえ。何でボクだけ師匠じゃないの？」

「いやいや、俺からしてみればみんな師匠だよ。エミリア師匠」

「お礼に『加速』を教えるよ」

「ありがとうー」

そんな感じに午後は終わった。

午後からは魔法の修行。

まず『炎弾』。

一応少しの集中で炎弾を扱えるようになった。
だからすぐに炎弾を使える。

「まゝ、回復は置いといて。これからやるか」

そこに書いてあるのは『電雷獣』。

まあ、雷の獣だ。

難しいけど強い。

ってか本音を言えばカッコいいから覚えたい。

「じゃあお手本見せますね」

地面に魔方阵がでて、そこから雷の獣がでた。
か、かつけー。

「ゆ、幸路さん？ 目がキラキラ光ってますよ？」

いやー、カッコいいじゃん。

現実ばっか見てた俺にとってファンタジーは凄い世界なんだよ。

「んじゃ、これを召喚すればいいんだな」

集中……。

魔方阵。

雷。

獣。

「（バチッ！） （バチバチッ！）」

「いつっ！」

「だ、大丈夫ですか！ 『回復』！」

雷に撃たれた？

「だからこれは難易度が高いんですよ。失敗したら痛いですし……」

「集中力が足りなかったかー」

「それもあります。経験不足かもしれませんね。もっと基礎のところからやりましょうね？」

「まあ、師匠がいうなら……じゃあ……これだ！」

『水龍』。

「ハア…… 幸路さん。さっきの話聞いてましたか？」

あー、また難易度高いのね……。

「じゃあ無難に『回復』かな」

「そうですね」

午後の修行終わりっ！

とりあえず『回復』は使えるようになった。

「ん、じゃあ、俺風呂入ってくるわ」

「あ、分かりました。ご飯前に上がってくださいね」

「りょーかい」

とりあえずお風呂へ直行。

「んー、いつ見ても広い」

簡単に言つと温泉。

難しく言つと温泉。

間をとつて温泉。

まあ、温泉なみの広さだね。

この前王様にこの城貰ったけど、広すぎだぜ……。

最初らへんなんて道に迷つて泣きそうだった……。

いつもセイの『探索』で助けてもらつてた。

ありがとうセイ……。

君がいなかったら俺は知らない部屋で独り死ぬところだったよ……。

…。

「ふうー、落ち着く……」

一人で温泉つてあつちの世界じゃほとんど無かつたからな。

あー、のんびりするー。

一人の温泉つていうのもいいなー。

毎日

『さー、男同士一緒に入ろうな』

とエミが言つて。

『そ、それはダメです!』

という流れで結局ゆつくりできないんだよね。

「（ポチャンっ）」

「!」

誰か……いる。

一応身のために桶を装備……。

「（ポチャンっ）」

「そこだ!」

思いつきり桶を投げる!

ソイツは手刀で桶を弾く。

そして物陰に隠れた。

「ゆ、幸路様! 私です!」

聞き覚える声。

でも今はオドオドしてる。

「そ、その声は……ミラン?」

「え、ええ……」

「な、何でここに……?」

無音の状況に耐え切れないから理由を聞いた。

「そ、それはこっちの台詞です! 私が温泉の入った数分後に幸路様が入ってきたのでしよう!」

「そ、そうなのか……すまん。でもだったら最初に言ってくればよかったじゃないか」

「い、言おうとしたんですよ。でも言うタイミングが……」

「……………」

「……………」

無言が耐え切られん。

「じゃ、じゃあ、さきにあがりますね……」

「あ、ああ……」

「こ、こっち向かないで下さないね……」

「わ、分かった……」

あー、たぶん顔が真っ赤だな……。

絶対に前が向けない……。

「（カチャンッ）」

ハア…… やつと出た……。

それにしても緊張したなー。

……。

……。

…… ハア。

この後、エミにからかわれて。
セイに色々追求された。

それはいわゆる才能さ

「『加速』」

エミが小刀で大きなモンスターと戦っている。

高速でモンスターを切り刻む。

最後に強い一撃を切り刻み、モンスター蹴ってモンスターとの間を空ける。

「『雷纏』」

くない数個に雷を纏わせモンスターに投げる。

エミが指を天に向けた。

「『落雷』！」

くないが当たったモンスターに落雷を落とした。

「さっすがエミだな……」

エミの強力な加速の後、雷の連続攻撃。

エミの得意技は加速と雷かな？

加速が得意だってことは分かってたけど。

雷は聞いてなかったな。

「『氷華』」

氷の花があたり一面に咲く。

もちろんモンスターの足は凍らせられて動けない。

「『氷柱』」

モンスターの真下から氷の柱が発生する。

モンスターは宙に浮かんでる。

「『氷花弁』」

氷華の花弁が宙に浮かんでるモンスターに突き刺さる。

氷系の魔法でモンスターと戦っているのはセイだ。

流石と言っべきか魔法に関しては最強だ。

「『攻撃力強化』」

ミランが攻撃力を上げてモンスターに斬りかかる。

続いてモンスターを蹴り間合いを少し開け、蹴った反動でモンスターを真つ二つに斬る。

刀の扱いにだったらミランが一番だな。

「そんじゃ、俺もやるかな」

今日はモンスター狩り。

生態系を崩さないように、害を及ぼすモンスターだけを倒す。

「『炎弾』」

まずは炎弾で怯ませる、そして一気に近づき刀で斬る。

まあ、当然まだモンスターは死なないわけで。

「（カチャッ）」

モンスターの頭に銃口を向け撃つ。

これが俺の戦い方。

魔法で怯ませ、刀で傷をつけ、傷ついて動けないモンスターの頭を銃で撃つ。

「あ、ずっと気になっていたんですけど、いいですか？」

「ああ」

セイが俺に質問してきた。

「どうやって魔王を倒したんですか？」

「私も気になります。武器もまともに扱えてなかったのに……どうやって倒したんでしょう？」

「まあ……裏技かな？」

「裏技ですか……」

「んー、気になるから教えて！」

エミも話の輪に入ってきた。

「まあ、隠すようなことじゃないしな」

「俺の才能とでもいうのか。俺は昔から“諦める”ことだけは得意だった。そしていつからか“過^{スキル}負荷”つつもんが使えるようになった。名前を『無理無力』。これを受けたやつは全てを諦める。まあ、魔王にこれを使って俺に勝つことを諦めさせ俺が銃で殺したつてわけさ」

ちなみに心を冷静にしている状態でしか発動できない。

「ほえー凄^ス魔法だね。セイは使える？」

「い、いえ……」

「これは魔法じゃなくて過^{さいのう}負荷」

「幸路様の世界にはそんなものが……」

「そうでもないよ？ みんながみんな持つてるっていうわけじゃないし」

まあ、俺が持つ才能はこれだけじゃないけどね。

「まあ、はつきり言つてしまえばこれは反則。だけどな俺は使わせてもらふ。だって俺は過負荷だからな」

「ボクはどっちでもいいよ。正々堂々も卑怯も勝てばいいんだしね」

「私も同意権です……」

「私もです」

あら？ ミランって正々堂々っていうイメージがあっただけだな……？

「……それに正々堂々っていうのも好きじゃないし」

「ん？ エミ何か言ったか？」

「え、あ、何も言つてないよ」

何だ俺の勘違いか。

「（バンッ！）」

扉が豪快に開けられた。

ここでは見ない服装……王様の家来か？

「どうしたんだ？」

「申し上げます！ 勇者様がさきほど倒されていたモンスターの親玉が出てきました！ 推測ですがあと一時間ほどでアクアに着き暴

れまわると……」

「そーか」

仇ね……。

「んじゃ、最後の始末をしてきますか」

「了解です」

「わ、分かりました」

「では行きましょうか」

馬に乗って親玉のところまできた。

ちなみに馬に乗る練習もしっかりしてます。

「うわー、でつけー」

体長4m？

「腕がなりますなー」

「まあ、楽勝じゃない？」

「セイリアがいれば楽勝ですね……」

「まあな」

セイはもしものためにアクアで待機。

「でも俺を抜かして、二人でもいけるだろ？」

「どうでしょう……私は大型モンスターとはほとんど戦ったことがないですし……」

「ボクもかな？ 大型は珍しいし」

「ん。じゃあ俺も参戦かな？」

「やりますよ」

その言葉を放つと同時にミランは走り出す。

「『攻撃力強化』」

まずは補強魔法で強化。

「はああ！」

ミランは親玉の足を斬りかかった……が。

「ハア！？ ほとんど無傷か」

「一応様子見として五割の力でやりましたが……無傷ですか……」

それでもミランの5割は強い。

俺との練習は三割ぐらいだな。

「じゃあボクの番！ 『加速』 『雷纏』！」

小刀に雷を纏わせ、高速で親玉に斬りにかかる。

これでも小さな傷しか開いてない。

「ありやりや？ たったこれっぽっち？」

「だな」

「さてどうやって倒しましょうか？」

「まあ、さっそく反則使う？」

「そうしましょうか」

「『無理無力』《諦める》」

親玉は持っていた金棒を落とした。

「これで終わりだ」

親玉の頭を銃で撃った。

「！？」

硬い……。

「それでは私が！」

凄い殺気があたり一面に放たれる。

「『炎斬』」

炎を纏わせた双剣で頭を狙う。

「くっ！」

それでも親玉は死なない。

「さーてどうしたものか……」

俺の過負荷を使ったとしてもこの硬さを変えることは不可能だ。

「ボクがセーちゃんを呼んでくるから、時間稼ぎしてて！」

「了解しました！」

「勇者の底力見せてやんよ」

まあ、力なんてないけど。

「では幸路様は後ろで援護射撃をしてください。私は頭蓋骨を壊します」

「了解だ！」

相手は諦めてるとはいえ、体が硬い……。

まあ、俺は援護射撃ね。

腰から二丁拳銃をとりだす。

「せめて動けなくなるまで足を撃ってやるよ」

『無理無力』には時間制限がある。

確か……一時間かな？

三十分後。

「ゆ、幸路さ〜ん」

やっとセイが来てくれた。

「こいつの硬さは異常だ。どうにかならないか？」

「えーと……任せてください。たぶんいけます！」

おお、頼もしいかぎりですな〜。

「では、『炎爆』」

あ！　そういうことね。

外からの攻撃がダメなら内からね。

セイの炎爆は親玉の口から入り、爆発した。

「まだまだですよ。『紫毒花』」

ん……初めて見る技だ。

倒れてる親玉の目に何かをした。

「今のは毒技です。一瞬で身体中に毒が回ったと思いますよ」

スゲー、流石最強。

俺も過負荷なしで戦えるようにならないとな。

蛙とか蜘蛛とか絶滅しちゃえばいいよ（前書き）

ええ、はい

サブタイトルが意味分らないことになってますね

一応意味はあるんですよ？

小説の中にでています

そして本当に蛙とか絶滅しちゃえばいいんだ！

蛙とか蜘蛛とか絶滅しちゃえばいいよ

「んで、これが今日の依頼か？」

「ええ……今日も頼りにしてますからね」

「まあ、頼りにするなら俺より優秀なメンバーを頼りにするんだな」
俺は歩き出し後ろにいる王様に軽く手を振る。

さて、修行開始。

「えー、今日のクエストは『螺旋城の大蜘蛛駆除』だつてさ」
「っ！」

「ん？ セイどうかしたのか？」

「む、虫は大の苦手なんです……」

「まあ、好きなやつはいないわな」

そういう俺も虫は好きじゃない。
っていうか嫌いだ。

とくに蛙とか蛇は特にな。

「じゃあ、セイ。今回はお留守番するか？」

「い、いえ！ 行きます！」

「そ、そうか？ じゃあ、頑張ってくれな」

「は、はい！」

「ここが螺旋城か……」

まるで蜘蛛の巣だな……。

「この蜘蛛の巣が螺旋状になっていたから螺旋城と呼ばれるようになったんですよ」

「ほー、説明ありがとう。ミラン」

「いえいえ」

さーて、簡単な話セイに頼んで炎系の魔法で焼いたほうが早く速いんだけど。

本人はびくびくしてて使い物にならない……。

「な、なあセイ。よかったら今から帰るか？」

「わ、私なら大丈夫です……ぐすん……」

「いや……泣きながら言われても……なあ？」

ミランとエミにアイコンタクト送った。

「たしかに幸路様の言うとおり、無理はよくないですよ？ 誰にでも得意不得意はありますし」

「そ、そうだよ？ ミランも幸路も言ってるんだし。無理しないで帰ろ？」

みんな頑張つてセイを説得中……。
十分後……。

「ハアハア……」

「ゼエゼエ……」

疲れた……説得失敗。

「まあ、いい。やるぞミラン！ エミ！」

「はい！」

「了解！ 『加速』！」

さっそくエミは加速状態になり蜘蛛の巣を斬る。

「硬くはないけど、全部斬るとなると無理だね」

「それじゃ『炎弾』！」

俺の炎で燃やす！

「っち！ 俺の炎じゃ燃えないか！」

「それに大蜘蛛が出てきませんね」

「ん。まあな、まあ蜘蛛の巣を攻撃してれば怒って出てくるんじゃないか？」

「そうかもね」

三人とも刀を手にして蜘蛛の巣を斬る。

「んで、これが大蜘蛛？」

「え、ええ……予想以上です……」

「う、うん。ボクもこんな大きさだとは思ってなかった……」
大きさは前回の親玉を上回る大きさ。

目測で横が8m縦も8m。

足の長さも結構長い。

「おいおい、これは覚悟きめねえとな」

「はい……」

「了解……」

「攻撃開始！」

『攻撃力強化』をしたミランが突っ込む。

二つの剣が大蜘蛛の腹(?)を切り裂き、腹を開いた。

「『雷纏』！」

雷を纏わせたくない数個を腹に向けて投げつける。

「『落雷』！」

エミが必殺の連続コンボを繰り出す……が。

「グオオオオオオオオオオ！！！」

まだ生きてやがる。

さっすが虫だ、しぶとい。

そのまま糸を吐き出す。

糸……。

「きゃっ」

予想通りなのか俺とセイ以外は拘束されてしまった。

「うっ、これ硬いです……」

さっきは普通に斬れたはずなのに……。

「あゝあ、俺だけか……」

どうやって倒すかな……『無理無力』を使おうかな。

そう思ったところで最悪の状態になった。

「ぎゃあああああああああ！！！」

「どうしたんですか！ 幸路様！」

「蛙が！ 蛙がいる！」

蛙のせいで平常心を保てない。

そのせいで『無理無力が使えない』。

絶対絶命？

「蛙なんて……蛙なんて……」

蛙は大っ嫌いだ。

絶滅しろとも思ってる。

だから……。

「完全に燃えちまえ！」

『無数炎弾』

その名のとおり無数の炎弾が俺の周りに発生。

「一斉発射！」

無数の炎弾は蛙目掛けて飛んでった。

「ふう……あ、やべえ……魔力使い果たした……」

魔力は無限にあるものじゃないからね……。

こんどこそ絶体絶命。

大蜘蛛が糸を出し俺を拘束した。

ハア……俺死ぬのかな？

短い人生だったな。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

続いてセイのところまで行く。

セイは大蜘蛛発見後即気絶……。

だからまじかに大蜘蛛がいることを知らない。

そして大蜘蛛が糸を吐こうとした瞬間。

「う……私、何でここで寝て……え、あ、きゃあああああああ
あああああああー！！！！！！！」

いきなりセイは起きて、目の前にいる大蜘蛛に驚き、叫ぶ。

「ち、ち、近寄らないでください！」

無数の魔法陣。

それらは大蜘蛛を囲む。

「『魔炎業火』……！！！」

それは確か……最上級魔法！

しかもそれを大量に使用……。

こいつはどんだけ最強なんだ。

あまりの熱さなのか大蜘蛛の糸は溶けた。

もちろん大蜘蛛はとつくのとうに黒コゲだ。

「セイ！ 攻撃を中止して帰るぞ！」

「え？ あ……ごめんなさい！」

「いや、いい。俺達は助かったんだ」

「よかったです……」

「それじゃ帰るぞ」

「りょかい」

「分かりました」

今回のクエストでセイがどれだけ最強つてのが十分分かった。
セイだけで魔王を殺せるんじゃないだろうか？ とも思った。

パーティーを抜け出して

大蜘蛛を倒した（ほとんどセイが活躍）翌日、俺達はパーティーに参加させられた。

もう一回言おう。

参加させられた。

俺はこういう派手なのとか華々しいのは苦手なのに。

王様が招待してきて、それにエミが乗っかって、セイとミランを仲間にして、多数決で俺が負けた……。

しかも俺初めてスーツなんて着たぜ……。

この世界はまだよく分らない。

元いた世界と同じようなところがあつたり。

なかったり。

私服は違うのにスーツとかドレスは元いた世界と一緒に。

電気はないけど豆電球に似た魔道具がある。

料理も日本で見たことがあるやつだ。

「勇者様が主役なのですからきちつとしてくださいね」

ハア……。

このパーティーは大蜘蛛倒した祝杯だそうだ。

だったら俺は主役じゃないじゃないか。

みんなでセイを祝ってやれ。

そう思った瞬間、みんながセイを祝ってるのを想像してみた。

まあ、オドオドして半泣き状態だ。

簡単に予想が出来るな。

「さあ、このドレスはどうか？　かな？」

そう言ってきたのはエミだ。

「どうだって、まあ、可愛いんじゃないか？」

こいつ男だけだ。

「もっと正直になれよ」

「これ以上どう正直になれと」

「いや」『俺の物にしたい』とか『愛してる』とか」

「残念ながらお前が女だったら言ってやるよ」

「実は私……女だったんだ。確かめてみる？」

エミは俺の手を取り、自分の胸に手を当てようとする。

いきなりの出来事で俺は対応できなかった。

「……貧乳？」

「いやいや、ボク男だから」

「お前は結局どっちなんだ……女って言うてみたり、男って言うてみたり……」

「ボクは真正銘男だよ？　今は演技だけど。ねえ、ドキドキした？　ねえ、ねえってば」

男の胸触って喜ぶやつがいるか……。

ってというのは半分冗談。

まあ、エミは性別は男だけど、容姿は完全に美少女だ。

エミが貧乳だと思えば……嬉しいかも。

エミには絶対にこのことは言わないけど。

「ゆ、幸路さん……」

ゴスロリというのだろうか？

白がベースで少し黒が入ってる。

元いた世界で可愛い子ぶっている奴等と違い、セイは自分を飾らない。

だから可愛い。

「に、似合ってるぞ、セイ」

なぜか俺は言葉がつつかえた。

「あ、ありがとうございます……」

「何それ！　ボクとは違う反応だね！」

「いや、だってセイは可愛い女の子だし。お前は可愛い男の子だろ？」

「か、可愛い……」

「ほら！ 幸路のせいでせーちゃんの顔が真っ赤！」

「はあ！ 俺のせいなのか？」

「い、いえ、そうじゃなくて……」

「いーや、幸路のせいだよ。言葉には気をつけるんだね！」

「うーん……いつも気をつけてるはずなのにな……」

「そ、そんなに気を落とさないでください！」

俺らはしばらくそんなバカ話を続けてた。

それでもミランは来ない……。

「なあ、ミラン遅いな」

「うん、そうだね。何かあったのかな？」

「え？ もう着替えを終わってるはずですよ。私と一緒に出てきたんですから」

ん、じゃあミランは何でこないんだ？

もしかして酔っ払いに絡まれたか！

「一応探すぞ」

たぶんミランだったら簡単に対処できてると思うけど。

「んじゃ、ボクあっちを探すね」

「そ、それじゃあ、私はこっちを……」

「じゃあ俺は」

「気持ちわかりますが、勇者様は動き回らないでください」

「うおっ！ ビックリしたぞ、王様」

「それは失敬……」

「でもな……」

「勇者様は今回のパーティーの主役なのですから」

「ハア……分かったよ」

仕方ないから俺は中央に残ることにした。

「勇者様は」

「異世界ってどんな」

「またこんど私が主催する」

うるさいのは苦手だ。
もちろん質問攻めも。

「『無理無力』」

制限時間は一分。

その間に俺は人ごみを掻き分けパーティー会場から出た。

「人ごみは慣れないから好かない……」

ある程度離れた部屋で俺はのんびりしていた。

今日は満月だ。

日本だったら月見をするかな？

俺にはそんな習慣がなかったけど。

今日は満月が綺麗だ。

俺は独りという空間で“寂しさ”を感じていた。

たぶんこれはこの世界で知った感情だ。

いつも周りにはセイやエミそれにミランがいた。

最近は楽しいの時間がばかりだった。

だからなのか、あいつ等がいなくなったらと考えると寂しい。

手を伸ばせばそこに人がいる。

でも、いつかあの満月のように手を伸ばしても届かなくなるのか

と思ってしまう。

俺の中ではいつの間にかあいつ等は大切な存在になっていたよう
だ。

だから俺は強くなる。

自分を、自分の仲間を守るために。

世界を救えるとは思ってない。

だから自分の手が届く人を守りたい。

たとえ手が届かなくなっても俺はあいつ等を守りたい。

「幸路様？」

「ん？」

着物を着た少女。

大人びた容姿で黒い髪をなびかせ俺の名前を呼ぶ。

「ここで何をしているんだ？ ミラン」

「こっちの台詞ですよ。パーティーはどうしたんですか？」

「すっぱかった」

「予想はしてましたが……」

「ミランこそ、何でパーティーに来なかったんだ？」

「え、あ……それは……」

「それは？」

「着物を着たのは初めてで……恥ずかしくて……」

恥ずかしい……ね。

やっぱりミランも女の子だ。

いつもはきりつとした頼りになる人だけど。

こういう時は可愛い……。

「俺は可愛いと思う。ドレスよりミランは着物のほうが似合う」

「わ、私がか、可愛いですか……？」

「ああ、可愛いぞ」

ミランは顔を真っ赤にして下を向いてしまった。

「なあ、ミラン」

「な、なんででしょうか？」

下を向きながらミランが答える。

「力って何だ？」

俺はミランに問う。

「誰かを傷つけるための力か？ それともみんなを守るための力か？ 俺の経験上から言わせて貰うと正義を語ってる奴等は全員後者だな。悪役は前者。残念ながら俺は前者でも後者でもないんだよ。

俺は自分を守るために力を使う。俺は弱い、弱すぎる。だから俺はこの過負荷で自分を守る。つつつても今は守るべき仲間が出来たんだがな……」

「私の力は」

「

「（バンッ！）」

扉は豪快に開けられた。

「やっと見つけた！ 二人とも探したんだよ」

「そ、そうですよ。パーティー会場では騒ぎになってますよ！」

「そうか、じゃあ行くか」

「そうですね」

「ボクなんて何も食べてないよ」

「私もお腹が空きました……」

「ほらほら、二人ともさっさと歩く」

「はい」

「では急ぎましょうか。主役が行かないと騒ぎは落ち着きませんし」

「だな」

こんな日常が続けばいいと思った。

いつまでも、いつまでも……。

僕はやっぱり弱者でしかないんだ

改めて自己紹介。

俺の名前は桜島幸路。

箱庭学園の二年・十三組に属していた。

過負荷は『無理無力』。

黒神めだかに改心させられそうになったとき、なぜか俺は倒れてこの世界に来てしまった。

そしてなぜか勇者になっちゃった。

正義感？ そんなのまったくありません。

世界を救いたい？ 俺がか？ はっきり言って無理です。

じゃあ何で勇者として戦ってるんだ？ 簡単な話だ。

楽しいからだよ。

RPGの主人公みたくカッコいいからだよ。

俺はあくまで過負荷だ。

あっちの世界じゃ主役どころか脇役にすらなれないからな。

せつかくのチャンスどぶに捨てるようなことはしない。

だから楽しもうじゃないか。

俺が勇者である物語^{せかい}を。

「それじゃあ修行開始つてな！」

俺が戦ってるのはスライム。

理由としては雑魚で俺の修行にもってこいだから。

「『体力強化』！」

この前覚えた体力強化を使う。

振り下ろした刀がスライムを真っ二つにする。

スライムは飛び散った。

「ふう……疲れたな……」

ざっと数えただけで百体近く倒した。

「そろそろ終わりにするか
イレギュラー
異常だ。」

キングスライム。

スライム同士が合体したモンスター。

さっきのスライムの何倍も大きい。

「おいおい……」

キングスライムが空高く飛び跳ねる。

「ちょ、ヤバイって！」

残念ながらここには俺しかない。

俺は本気で走る。

ギリギリのところで避けた。

「『無理無^{あきらめろ}力』」

スキル過負荷を使い諦めさせる。

さーて、どうやって倒そう……か。

ありえないだろう……。

俺の過負荷スキルが無効化された……？

「つたく、一体何者だ？ このスライムは異常を起こしまくりじゃないか」

またスライムが飛び跳ねた。

俺は走って逃げる。

「ぐあっ！」

だが避けることは出来なかった。

そのまま俺はスライムの下敷きにされた。

ぐっ！

圧されて力が出せない……。

そのまま、俺は意識を失った……。

「幸路様！」

私が駆けつけた頃には幸路様はキングスライムに下敷きにされていた。

ぐつつと拳に力が入る。

私がついて行かなかったから……。

「みーちゃん、自分を責めるのは止めな。今しなくちゃいけないことは幸路を助けることだよ」

「そ、そうですよミランさん。自分を責めても幸路さんは助かりません……」

「ええ、でも……」

「いいから！　いくよ！　『加速』！」

エミリアが加速状態でスライムを斬る。

でもスライムはすぐに再生した。

雷攻撃をすれば下敷きにされてる幸路様が危ない。

「『炎弾』！」

セイリアは幸路様に当たらないように魔法を放ってる。

「『攻撃力強化』！　はあああああ！！」

私に力があれば、守れたはず。

力があれば、すぐに助け出し手当てをすることが出来る。

でも今の私は無力……。

ただ無力で何も出来ない、ただの人間。

『なあ、ミラン』

幸路様の幻聴が聞こえる。

朝聞いたはずなのに懐かしい。

とても安心できる声音。

『力って何だ？　誰かを傷つけるための力か？　それともみんなを守るための力か？　俺の経験上から言わせて貰うと正義を語ってる奴等は全員後者だな。悪役は前者。残念ながら俺は前者でも後者でもないんだよ。俺は自分を守るために力を使う。俺は弱い、弱すぎ

る。だから俺はこの過負荷で自分を守る。つつつても今は守るべき仲間が出来たんだがな……」

力……。

私は何で剣を振るう？

敵を倒すため？

全てを守るため？

自分を守るため？

いや、違う。

私は大切な幸路様を助けるため。

弱い幸路様を守るために剣を振るう。

最初は勇者様の護衛だと伝えられ城に呼ばれた。

第一印象は元気な青年。

だけど身近で見ていると違った。

とある部屋。

幸路様が満月の光に照らされてる。

幸路様は全てが終わったかのような無表情。

だけど、どこか弱々しい。

そんな表情。

本当の彼は弱い。

ガラスよりも脆い。

そんな彼を私は守りたい。

彼は私達には見えない何かと戦っている。

私は幸路様を見えない何かから守りたい。

「大切な幸路様を守りたい！」

剣は桜の花弁になり消える。

「スライムごときが幸路様を踏みつけて良いと思っているのか！」

「み、ミランさん……大丈夫ですか？」

「たぶん今のみーちゃんには周りの声は聞こえないんじゃないのかな……？」

私は何も持たないでスライムに近づく。

「私が鉄槌を下してやろう！」

桜の花弁が私の手に集まる。

桜の花弁は一本の剣に変わる。

長さは50mぐらいの剣。

キングスライムなんて簡単に真つ二つにできるぐらいの大きさだ。

「幸路様を踏みつけたことを悔いよ」

私はそれでキングスライムを横から切りつけ真つ二つにした。

「わ……」

「はわ……」

「ん？ お二人ともどうかしたんですか？」

「い、いや……開いた口が塞がらないというか……」

「何と言うのでしょうか……」

「凄かったね」

「わ、私もビックリしましたよ」

私もビックリしている。

だって知らない技がいきなりできるようになったんだから。

『幻影夜桜』……それが幸路様を守るための力。

俺は“俺”であり弱者だ（前書き）

少し時間があきましたが
どうぞ！

俺は“俺”であり弱者だ

暗い。

暗くて暗くて暗い。

真っ暗な空間。

何の音もしない。

俺だけしかない空間。

どこか懐かしいような悲しいような。

そんな空間。

「幸路さん……」

キングスライムが幸路さんを襲ってから三日が過ぎました。
けれど幸路さんは目を覚ましません。

お医者さんが言うには、いつ目を覚ましてもおかしくない、
だそうです。

全ては私達が……。

どこが最強ですか！

一人の大切な人さへ守れてないですか！

私は幸路さんの布団をギュッと握り締めます。

「幸路さん……帰ってきてください……」

居心地はいいわけではない。
逆に居心地は悪い。

だけど俺はここにいてしまう。
だって俺には他に居場所がないから。
違う場所に行ってしまったら俺は絶望してしまう。

あの日みたいに……。
中学三年生のあの時みたいな絶望が俺を苦しませるだろう。
だから絶望しないためにここいる。
傷つかないで生きるために。

私は幸路さんの手を握る。

その手は温かく冷たい。

温かいはずなのに冷たくも感じる。

そんな幸路さんの手を私は思いつき握る。

幸路さんに冷たさを感じさせないために。

私が幸路さんを暖める。

冷たい氷を溶かすように。

真っ暗なこの空間が消えた。

続いて真っ白な空間に変わり俺の前には大きな鏡が現れた。

『なあ、俺。お前はまだそんな理想を捨ててなかったのか？ 理想
なんて全て幻想だ。絶望する前に捨てちゃえよ』

理想は全て幻想？

『お前だって分かってるんだろ？ こんな毎日が続かない。今まで
もそうだっただろ。希望は絶望へと変わるんだ。その希望が大きい
分、絶望も大きくなる。お前には絶望してほしくないんだよ』

希望が絶望へと変わる。

『なあ、昔みたいに仮面をつけようぜ』
仮面……？

ああ、嘘の仮面か。

『嘘をついて自分を守れ、嘘をついて友達関係を作れ。そうすれば
お前は傷つかないで済む』
嘘をついて自分を守る。

握っても握っても幸路さんの手は冷たい。

彼の手が体が心が。

彼の全てが冷たい。

彼の氷は簡単には溶けない。

手を伸ばせばそこにいる。

だけど心に触れようとするとその氷が邪魔をする。

「幸路さん、私達はそんなに頼りないですか……？」
そう呟いた言葉は誰にも聞かれず消える。

『なあ、おい。その俺。仮面をつけようぜ』

差し出される仮面。

戸惑う俺。

俺は今、この仮面に縋るしか出来ないのか？

自分が傷つかないための仮面。

俺は今、手を伸ばした。

「ねえ、せーちゃん。もう休んだほうがいいよ」

「次は私達が見ますので」

「私も見てます……」

私は幸路さんが起きるまでここにいます。

たとえ何年でも。

私を必要としてくれた人ですから。

「それにしても何で起きないんだろう？」

「何ででしょうね……」

魔法の回復を使っても起きませんし。

何をしても起きません。

呼吸はしているので死んではないです。

「起きたくないのかもね」

「えっ？」

「あ、いや、たぶんそうかも知ないって。体に問題はないなら、問題なのは精神でしょ？ だから精神がまだ起きたくないって思ってるんじゃないかな？」

起きたくない……。

つまり私達に会いたくない。

戦いたくない。

傷つきたくない。

幸路さん、何で起きてくれないんですか？

藁に縋るように俺は仮面に手を伸ばす。
自分が生きるために。

『そう、それでいい。お前は一生仮面をつけ続ける』

やっと仮面を手に入れた。

生きるための術を手に入れた。

傷つかないための仮面を手に入れた。

「俺は一生傷つかないで済むんだあ！！……………何て言うと思っ

たのかカス」

『な、何！？』

「一生傷つかないだあ？　つざけんな！　俺はここに来て知った！
仲間を持って初めて知った！　幸者フリスのやつらは何で仲間のために
傷つこうとするのか！　前までの俺だったら知らなかったぜ。いや、
知ろうともしなかった。けどな！　俺は分かった。傷つかずに幸
せを勝ち取るうなんて無理だ。傷ついて傷ついて……………傷つきながら
強くなるから幸者フリスは強いんだ！」

これが俺の答え。

いつか違う俺に問われた、俺の答え。

『そうか、まあ頑張れや、過負荷フリス』

「ああ、頑張つてやるさ」

さつき受け取った仮面を自分の顔につける。

「そしてありがとうな」

『どうも』

俺は鏡を壊した。

俺の新しい力で。

温かい。

さつきまでの冷たさが感じられない。

「起きます……………」

「え？」

「んー、おはよー」

「ええ!？」

「? どうしたのそんなに驚いて」

まあ、驚くのは普通だと思います……。

「あ、セイ」

「な、何でしょうか？」

幸路さんは私の顔を触ってきます。

それだけで私は恥ずかしいので顔が真っ赤です……。

「隈が出来てる……セイ寝なきゃダメだぞ。はい! 早速ベッドへ
レッツゴー」

「れっつー」

「わっ! きゃっ!」

わ、わわわわ、私は今幸路さんにおんぶされてます……。

温かい……。

落ち着きます……。

そう思うと欠伸が出ていつの間にか寝てしまいました……。

「ほー、俺はそんなに寝てたのか」

セイを部屋まで連れって行ってベッドに寝かせて、違う部屋でミ
ランとエミと話してる。

俺三日も寝てたんだ。

「その間ずっとセイが看病してたんですよ」

「そうか……じゃあセイにはお礼をしなくちゃな」

「ですね……」

どおりで隈が出来てたわけだ。

「ボクにはお礼なし？」

「エミも何かしたの？」

「うん、したさ。おでこのタオルとか変えたり、汗かいてたから拭
いたり。大変だったんだよ。男はボクしかいなかったんだから」

「はいはい、じゃあエミにも俺をしようか」

「もちろん、ミランもしてたよね」

「え、ああ、まあ、はい……」

謙虚そうにミランは返事をする。

「そんじゃ、明日は街に行きますか！」

「賛成！」

「私も賛成ですね」

「もう、夜なんだから二人は寝な」

「え、あ、はい。では失礼」

「じゃあね」

「ああ、さて俺も自分の部屋に戻ろうか」

……………。

「……………眠れん！」

俺が寝たのはそれから三時間後のことでした……………。

あつちでなくこつちで感じるもの

俺が三日間の眠りから目覚めた翌日。

俺達は城を出て街に来ていた。

「へー、街ってこんな感じなんだ」

レストランや服屋。

あつちの世界と同じだな。

違うところは電化製品の店がないこと、武器屋があること。

「街に来るのは初めてですか？」

「まあな、外はクエストのときしかでないしな」

だからいつか行ってみたいって思ってた。

「じゃあ、何が欲しい？ おじちゃんが買ってあげるよ」

ちよつと冗談を交えて聞く。

「ボクは小刀！」

「で、では私は……新しい杖を……」

「それでは私も新しい双剣で」

聞いたことあるけど……それってかなり高いよね？

「わあー、ここが武器屋か」

「ええ、ここので一番性能がいいやつが揃ってます」

「つていうかボクが欲しいのはここしかないよ」

「わ、私もです……」

まあ、金があつたもこの世界にはゲームがないから金になつくていいし。

それに食事は王様のほうで払ってくれるし。

「じゃあ、みんな選んで」

「……はい……」

ついでだし俺も買おうかな。

俺がいいと思っただのは「魔炎剣」。

杖みたいに魔法の攻撃力を上げる剣。
とくに火系の魔法をね。

それと「波動銃」。

魔力の波動を打ち出す銃。

普通の魔力の弾を打ち出すことも可能。

縦に真っ直ぐに撃てるし横に広がった弾を撃てる（ただし飛距離は長くない）。

俺はこの二つを買おうか。

「あ、あのう」

「ん、決まったのか？ セイ」

「はい、これです……大魔石杖」

ほー、大魔石を使った杖ね。

今の杖より性能がかなり上だから、セイはまた強くなるのか……。

「だ、ダメでしょうか……？」

「いや、いいよ。セイは限はできるまで俺の看病をしてくれたんだ。
そのお礼なんだからこれくらいお安いもんだよ」

「幸路様」

「ミランも決まったの？」

「ええ、この炎氷式の双剣を」

ミランが選んだのは炎の剣と氷の剣。

まあ、魔力を剣に注ぎ込めば炎と氷が使えるってやつだ。

しかもその剣は性能がいいので炎も氷もかなり強いみたい。

「それにしても結構時間が経ったのに、エミリアはまだですか？」

「わ、私は一番最初に選んでくると思ってたんですが……」

「まあ、いいじゃん。まだ時間はあるんだし。まだ見ててもいいんだよ？」

「わ、私はいっぱい見ましたから」

「私事です」

「そう」

まあ、俺も結構見たんだけどね。
しばらくエミを待った。

「お、遅いですね……」

「たしかにそうですね……」

「探すか」

「エミリアさんのことだから……小刀のところでしょうか？」

「ああ、たぶんな」

っていうことで俺達は小刀が売っているところに行った。

「エミ……っっていた」

「何をしているんですか？」

「え、あー、それにしようかなと。眺めてた」

トランペットを眺める子供ですか君は。

「それで買いたいやつはあったのか？」

「うん、まあね」

エミが指を指したのは神式雷刀。

もちろん小刀。

「それでいいのか？」

「うん」

「では何で遅かったんですか？」

「遅い？ あ、ごめん。決まってたけどずっと眺めてたら時間忘れてた」

えへへ、と舌を出しながら言うエミ。

お前は男なのか？ と問い質したい。

「それじゃ、買うぞ」

「おねがうい」

「お願いします」

「お、おねがいです」

「全部で八千五百万円です」

やっぱり高いよね……。

「はい」

「ありがとうございます。あとプレゼントです」
指輪？

「これは召喚石で作った指輪です。武器を指輪に登録することで、武器を持っていかなくてもその指輪で武器を召喚することが可能になる優れものです」

ほー、便利だ。

「ほい」

「わー、指輪だー」

「これはありがたいですね」

「便利です……」

「登録の仕方は指輪に魔力を注ぎ登録の魔力を得られますので、続いて登録の魔力を武器に注げば終わりです。そこで武器が消えますが指輪にしまつてあるので心配しなくてもいいです。指輪に召喚と唱えれば武器を召喚できます。慣れれば唱えなくても召喚できます」

「説明ありがとうございました」

「じゃあ、お昼だしレストランでも行くか？」

「そうですね」

「私もお腹空きました」

「ボクはオムライス」

近くにレストランに入る。

そしてすぐに店員さんが「何名様ですか？」と、あっちの世界の決まり文句でもてなす。

「四名です」

そして店員さんに窓側の席に誘導された。

「レストランってあっちの世界と一緒になんだな」

「そうなんですか？」

「ふーん」

「ああ、まったく一緒だ」

その後、メニューを見て注文した。
もちろんエミは宣言どおりオムライスを選択した。

「暗くなりましたね」

時は五時。

「ああ、そろそろ帰るか」

「はい！」

「うん！」

満足そうな笑顔で答えるセイとエミ。

レストランのあと服屋さんとか色々なところに回った。

あつちの世界じゃ友達とかいなかったから新鮮で楽しかった。

俺はかなり後悔している。

黒神めだかに早く出会って早く改心していたら楽しい学園生活が遅れていたのかもな。

後悔しても意味はない。

だから俺はこっちの世界で楽しむことにした。

無力な嘘つきだ

「お前らはついてこなくていい」

「で、でも！」

「俺には作戦があるんだ」

「そう仰いますが……」

「次は絶対に成功する」

「まあ、幸路が絶対って言ってるんだし、いいんじゃない？」

「ああ、俺は絶対に負けない」

俺は今からまたスライム狩りをしに行く。

今度は絶対にキングスライムが出ないところへ行くからとセイと

ミランに説得中……。

「俺が信じられないのか？」

「い、いえ……そういうわけじゃないんですが……」

「じゃあ、行け」

俺は無理やり会話を終わらせスライムのところに行く。

「ここか……」

キングスライムは特定の場所ではない。

前回のところは出ないところだった。

「そんじゃ、スライム狩りを開始させてもらうかな」

本音はスライム狩りではない。

「新しい武器の威力試させてもらおうじゃないの！」

俺は剣を構える。

「はああああ！！」

スライムに剣を振り下ろす。

そして他のスライムが俺に向かって突進。

「『火炎屏風』！」

この技はこの魔炎剣があるからこそ扱える魔法だ。

そして残つた奴等を炎を矢で撃つ。

俺の勘では来る。

そんな音が聞こえそうなキングスライムが現れた。

そしてキングスライムの突進。

「残念ながら俺の剣では倒せない……だから弱点は克服させてもらった」

ズガンっ！

「剣で斬っても再生されるなら、波動で中に衝撃を与えてやろう」

そして俺は確かめる。

この前喰らわなかった過^{スキル}負荷を發動させる。

キングスライムが上に跳ねる。

俺は過負荷が利いてないのに笑ってしまう。

今ので少し確信が持てた。

銃をキングスライムのいる真上に構える。

一回の発砲で数弾の波動を打ち出す技。

それを乱れ撃ちだ！

「（ズガンッ）！」

数秒その音が俺とキングスライムしかない空間に響いた。
そして数秒後キングスライムが落ちてきた。

「もう壊れたか。じゃあ本題。見えてるんだろ？」

俺は独り言のように呟く。

いやいや、俺は悲しいやつじゃないからね？

空想の友達なんていないからな？

俺はいると思われる人物に話しかける。

『あらら？ バレていましたか。流石勇者様と言つべきですね』

「まあな、たかがキングスライムスキルごときが俺の過負荷を打ち消せるわけないだろう。だったら俺の過負荷スキルを打ち消せるのは強いやつ…

…魔王だな」

『では、前回倒された魔王は何でその力を打ち消せなかったんでし
ようね？』

「俺もそこは疑問に思ってたけど、答えは簡単だろ。俺の過負荷スキルを
予想できなかった。または弱いだけ」

『流石ですね。どっちも正解ですよ。彼は弱いし、反応できなかった……でも今回は彼のようになりませんよ。僕は君を調べました
からね。だから貴方の『無理無力』を打ち消しました』

「ほー、魔王つてのは勇者を調べ上げ倒すのか。力ずくで倒すつて
考えてたよ」

『魔王はそこまでバカじゃないですからね』

「んじやさ。魔王さん、俺と戦おうぜ」

『ええ、こっちもそのつもりでしたし。それに僕は『無理無力』は
利かないので』

すると地面が割れた。

そしてカプセルのような箱から眼鏡をかけた男が出てきた。

「では、さっそく死んでください。勇者幸路」

「こっちのセリフだ魔王。まあ、まずは『無理無力』《諦めろ》」

俺はさっそく過^{スキル}負荷を使う。

「その程度ですか？ 勇者って」
まあ、利かないわな。

「では、こっちの番です。『土縛』」

土が俺の足を縛ってくる。

ちっ！ 動けない！

「『炎弾』！」

こっちに近づけさせないために炎弾で攻撃する。

「こんな弾、僕には利きませんよ」

「ですよー」

「では、僕も。『土人形』」

土人形……ゴーレムか？

「土に偽りの魂を入れた、僕の最高傑作にお人形ですよ。さあ、遊んでください」

遊ぶならまず足枷を外せ！

それにしても偽りの魂ね……。

試してやろうか……。

「さあ！ 殺っちゃいなさい！」

数体のゴーレムが俺を襲う。

ゴーレムの拳と俺の顔の距離が1cm。

ゴーレムは俺を殴らない。

「な、何で動かないんだ！ 僕の土人形は『無理無^{スキル}力』は利かないぞ！」

「ああ、そうだろうな。だから俺は新しい……いや、最初の才能の強化版『全変転化』を使わせてもらった」

ちなみに強化前は『嘘つきの仮面』。

俺が最初に手に入れた才能『嘘つきの仮面』を強化した『嘘つき道化師』。

「行け！ ゴーレム！」

俺はゴーレムに指示を送る。

「な、何で！ そんなのデータになかった！」

「そのデータは古すぎだ。俺に勝ちたかったら俺以上に過^{マイナス}負荷になれよ」

ゴーレムの相手をして動けない魔王に近づく。

「最期に教えてやるよ。俺の『嘘つき道化師』は俺の^{うそつき}ための過^{スキル}負荷だ」

俺は拳を握る。

「俺の肉体に嘘をつき、攻撃力を上げる……」

「っ！」

魔王は声にならない声で叫んでる。

「今の俺の力は通常の倍の力だろうな」

そしてもう一度力強く拳を握る。

「死ね」

強く握り締めた拳で魔王を地面に殴りつけた。

地面は俺を中心にして凹んでる。

「俺は無力な嘘つきだ……」

出会いは偶然か運命か

動けない……。

一步も歩けない。

寝返りをうつことも無理だ。
なぜなら……。

「俺は無力な嘘つきだ……」

魔王を倒した俺は独り呟く。

「さて、ミランとセイが心配する前に帰るか」

俺は地面に殴りつけていた拳を上げる。

「うつ！」

痛い……。

骨折ではない……。

でも体が動かない……。

「もしかして……『嘘つき道化師』を使ったから……」

慣れない過^{スキル}負荷を使ったから体が耐え切れないのか……。

全身筋肉痛……。

ミランとの練習の後の筋肉痛より痛い。

あれから五時間。

俺はまだ動けないでいる。

あたりは暗くなりつつある。

たぶん城では。

「ま、また幸路さん……」

「急いで探しに行きますよ！」

「流石にこの暗さは危ないからね……」

つてな感じになつてゐるだろう。

「あゝ、誰か助けて」

俺は何となく呟いてみた。

「……呼んだ？」

「うわっ！」

いつもだつたら体を飛び上がらせ驚くのだが、体が言うことを聞いてくれない。

「……酷い人」

「すまん、すまん……いきなり出てきて、ビックリしてさ」

絶対みんなビックリすると思う。

俺の前に立っている少女の身長はセイと同じ位の小ささ。それでいてセイとはまったく違う雰囲気漂わせてる。

「……お兄さんはそこで何をしてるの？」

「ん、俺か？俺は筋肉痛だ」

女の子は「……ハア？」というような感じの顔をしてる。

「使い慣れない技を使って全身筋肉痛！。そこでここから動けないから寝てるってこと」

「……そういうこと。名前が筋肉痛かと思った……」

「ないない。子供に筋肉痛って名づける親の顔を見たいぜ」

「……それで私に何の用？」

「いやー、適当に呟いてみただけ」

「……そう……では」

少女はそう言つて歩き出した。

「ちよつと待ってくれ」

「……まだ何か用なの？」

「助けてくれ……」

這い蹲るように頼んでみる。

「……いやだ」

「……助けて」

「……無理」

「……助けてお願いします」

「……もう一声」

「……何でも言うことを聞きますから……」

俺はどうにでもなれ！　と思いつながら危ない一言を言った。
良い子のみんなは知らない人にそんな事言っちゃダメだぞ

「……じゃあ。『回復』」

一気に筋肉痛から回復する。

ああー、気持ちいい……。

残念ながら俺の『回復』では、この筋肉痛を治すことが出来なかった……。

「お前って回復魔法が得意なのか？」

「……うん、まあ」

「ふーん、で、一応お礼だ。俺に何をご所望だ？」

「……私に（ぐううううー）」

「……」

「……」

「……とりあえずメシ食うか？」

「……（コクコク）」

「それで、彼女は誰なのですか？　幸路様」

「えー、俺の命の恩人です」

俺と女の子が食事を済ませて、ミランが質問してきた。

「なんだ、誘拐じゃないんだ。ロリコンじゃないんだ」

「おい、エミ。言っている事と悪いことがあるぞ？」

「う、ごめん……」

ロリコンには悪い思い出があるのでイラッってきてしまう。

「……ロリコンじゃないんですか（ボソッ）」

「ん、セイ。何か言ったか？」

「い、いいえ。何も……」

でも何か言っていたような……。

「幸路様！」

「は、はい！」

なぜか俺は強めに返事をしてしまった。

「何がどうなって、どうなったのでしょうか？ 色々説明してください。私たちがだって凄く心配したんですから！」

「そうだよ幸路！ みーちゃんなんて『幸路様が……幸路様が……』
つてずっと呟いたり。『幸路様がいなくなったら私は……』
つてずっと五月蠅かったんだからね」

「あー、はいはい。まあ、簡単に説明すると……」

俺がキングスライムと戦い、魔王と戦い。

それで筋肉痛で五時間動けなくて。

この女の子に助けてもらったことを説明した。

「そうですか……また魔王をお独りで倒したんですね……」

「だってあれは俺の推測だったし。まさか本当に魔王が出るなんて
思ってたから」

「分かりました……で、名前は何て言うんですか？」

「あ、名前。俺も聞いてなかった」

そつえば筋肉痛の辛さで忘れてた。

「……私は柊舞華^{ひろいまいか}」

「っ！？」

「どうしたんですか幸路様！？」

日本人！？

違う世界……俺と同じ世界の住人。

「おい！ 柊！」

「（ビクッ！）………何？」

「お前はこの世界の住人か！」

「……………」

「お待ちください！ 幸路様！ 戸惑っていらつしゃます！」
俺はそこで気づいた。

「ごめん……」

「……いや」

ハア……俺、最悪だ……。

ちよつと興奮してしまつた……。

「まあ、もう一回質問する。お前は这个世界の世界の住人か？」

「………違う」

「！ じゃあ、お前は日本人か？」

「！ ……貴方も……？」

俺だけではなかつた。

这个世界に來た人間。

「………そういえば、貴方の名前は？」

あ、そういえば自己紹介忘れてた。

「俺の名前は桜島幸路。箱庭学園の生徒だつた。今はこの城の主
でこの世界の勇者らしい」

まあ、俺が箱庭学園の生徒に戻れるか不明だがな。

「………っ！？」

「??」

ん？ 何でビックリしてるんだ？

「……箱庭学園元十三組現・十三組……桜島幸路先輩ですか……？」

「！ 何で知ってるの？」

でも答えは何となく分かるけど……。

「……私は箱庭学園十三組でした……」

同じ箱庭学園十三組。

異世界に連れてこられた俺達。

何がどうなってるんだ……。

「まあ、俺と柊は同じ境遇か……」

「………はい」

「んじゃ、柊、お前はここにいろ。同じ境遇なら一緒のところにい

たほうがいいだろ？」

「……いいの？」

「ああ、それにお前行くところないんだろ？」

「……………（コクッ）」

柊はすぼしだったのか顔を赤く染めてる。

「「「???」」」

そんな俺等を見て頭にハテナマークを浮かべてる人が三人。

「簡単に説明すると、こいつは俺と同じ境遇でこの世界に来てしまった異世界人。まあ、俺と同じ世界の住人だな。そしてこの城に住むことになった」

「「「は、はあ……………」」」

いまいち納得してない顔だな…………。

「……………よろしくおねがいます」

「まあ、詳しいことは分からないけど、よろしく」

「よ、よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします……………」

まあ、そのうち打ち解けるかな？

「……………先輩」

「ん？先輩ってのは俺でいいのか？」

「……………はい」

「で、何だ？」

「……………先輩って何でこんな大きい城の主なんですか？」

「ああ、俺はこの世界では勇者ってことになってるんだ」

「……………マジですか」

「マジですよ」

「あ、そつえば何で柊は『回復』を使えたんだ？」

「……見よう見真似ですよ」
「凄くキラッとした顔で言われたぜ……」。

正義が勝つのは少年誌だけです

俺と同じ境遇の少女、柊舞華。

何で俺達がこの世界へ来たのか、どうやって来たのか。

全て不明。

これは夢なのだろうか？

ミランもセイもエミも。

全て何もかも俺が創りだした幻想なのだろうか？

考えても考えても分からない。

分からないなら考えなければいい。

俺はそう自分に言い聞かせ眠る。

ガタガタ……。

眠りから覚めた俺は馬車に乗っていた。

俺の記憶が正しければ約束も何もしていなかったはずだ。

俺は窓から景色を眺める。

辺りは広原。

奥には綺麗な海。

俺達はそれを背景に馬車に乗っている。

「なあ、何で俺はここにいるんだ？」

「幸路様も知りませんか……」

起きているのは俺とミランだけ。

他のエミ・セイ・柊は寝ている。

「その返事だとミランも知らないようだな」

「ええ、起きたら馬車に乗っていました……」

たぶんだけど王様の仕業か？

でもなぜ？

魔王の刺客だった俺達は死んでるはず……。

「まあ……考えてもしかたないか……」

俺はまた考えることを止め寝た。

「……て……さい」

ん……声が聞こえる……。

「おきて……さい」

これはミランの声か？

「起きてください！」

「（びくっ！）」

俺はビククリして起き上がった。

「どうしたんだ！ ミラン！」

何だか状況が分からないからミランに尋ねる。

「い、いえ。馬車が止まりましたので。起こしました」

馬車……？

あ、そういえば俺達馬車に乗ってたんだっけ？

「んで、みんなは？」

「まだ起きません……」

「じゃあ、馬車を運転してた人は？」

「最初から見当たりませんでした……」

運転手がいない？

じゃあ、馬が勝手に動いた？

そして俺達をここに連れてきたということか？

「意味が分からん……」

そして俺達が着いたところは大きなお城。

俺達が住んでいる城より大きい城だ。

「もしかして魔王の城じゃないよな？」

「否定は出来ません……」

「ですよー……」

どうしたものか。

「とりあえず、みんなを起こそう」

「……　　っつーことだ、理解したか？」

「は、はい……」

「まあ、分かった……　　かな？」

「……理解した」

まあ、大体は分かってくれただろう。

そう言う俺だって大体しか分かってない。

「まあ、とりあえず。城に乗り込む？」

エミが簡単に言ってきた。

「でも残念ながら武器は持ってないだろう？　　指輪だって」

「え？　　あ、ホントだ……」

残念ながら俺達は服は着ているのに武器は持っていないという状

況だ。

「ミランは素手で戦えるか？」

「ええ、まあ、はい」

「エミは素手で大丈夫か？」

「ん、ボクは……　　ビミョーかな？」

「セイは魔法で戦うとして。柊は戦えるか？」

残念ながら俺は柊は戦ってる姿を見たことが無いので何とも言えない。

「……　　私は回復専門だから。他は無理……」

「了解」

前にミランとエミ。

真ん中に俺と柊。

後ろにセイ。

という形で城に入ることにした。

「では行きます」

ミランが合図し、扉を開ける。

「城の主はいるか！」

最初に入ったミランが主を探す。

そして俺達とは違った雰囲気だ。城にあった。

「お待ちしてりました」

メイド？

俺の目が正しければ今でた人はメイドだ。

「お前は誰だ？」

ミランは警戒しながら問う。

「私はこのお城のメイドです。貴方がたのことは主から聞いています」

む、主？

その主が俺達を招いたのか？

ふうっ……なら話が早い。

その主をボコればいいんだろう？

俺達を勝手に馬車に乗せ連れてきた。

ムカつく……。

絶対に半殺し……いや、殺してやる。

「こちらです」

大きな扉の前に連れてこられた俺達。

「この部屋で主がお待ちになっておられます」

そうか……この部屋に俺にぶん殴られるやつがいるのか……。

「……クロス」

「幸路様！？」

「何だ？ ミラン」

俺は少々機嫌が悪いんだ。

「いえ……何も」

何かを察したのかミランは黙った。

「一応言っておくが……俺はこの主ってやつを殴るつもりだ。いや、ボッコボコにするつもりだ」

俺はメイド以外のみんなにしか聞こえないようにボソッと呟く。

「が、頑張ってくださいね……」

セイは苦笑しながら答えた。

「……一応戦闘の準備はしとけ」

さーで、どんなバカ面のやつが俺を連れてきたんだ？

不細工だったら殺す。

イケメンだったら殺す。

微妙でも殺す！

「邪魔するぞ、バカ野郎！」

扉に俺の渾身の蹴りをいれた。

「……………」

口をポカーンと開けている人が一人。

セイだ。

「（ちょ、こんなことしていいんですか！？）」

セイが俺にしか聞こえないように話しかけてくる。

「（俺達を勝手に馬車に連れ込んだんだ。これぐれい許されるだろう？ 許されないのなら、目の前にいる主を倒し、この城の金を全部貰い、最後にこの城を破壊する）」

もう立ち上がれないようにな。

「んで、お待たせしたなバカ野郎」

俺は威嚇するように前にいる主とやらの話しかける。

「まったく、遅い！ 下級生物が俺様をバカ野郎と？ 冗談をよせ偽者」

はあ？ 偽者？ 何のこと？

「そうだったな、お前みたいなのやつはバカ野郎ではなかったな。訂正させてくれ下種野郎」

そういうことね。

俺のことを偽者と言った事が理解できたよ。

「ほー、では今ここで殺すと？」

「ああ、本当は勇者を名乗るな。と言って追い返すつもりだったが

……俺様はイライラする」

「ふーん、俺は殺されるのか……」

やべえ笑いを堪えるだけで必死だ。

お前が勇者？ 俺は偽者？

結果を残さない勇者なんて必要じゃないんだよ。

「どうやって俺は殺されるのかな？ 勇者くん（笑）」

「（笑）をつけるな！」

いやいや、だって笑いが止まらないんだもん。

「ほら、この扉の後ろには俺の仲間^{パーティー}がいるんだぜ？ 偽者が本物に

勝てるわけないだろう」

やれやれ……。

俺は面倒くさいのに絡まれたな。

「お前は特別に俺様の勇者の剣で殺してやるよ」

「幸路様！」

ミラン？ 俺を心配してくれるの？

心配してくれるのも嬉しいけど、この場面だったら楽しまなきゃ

ダメだぞ……………俺とエミみたいに。

「『加速』」

エミは加速でいつきにバカに近づく。

そして足を蹴り、バカのよろめく。

「さて、これで俺達が有利になったけど……………殺していいよね？」

「ご主人様！」

お、ここでバカのパーティー登場ね。

数は四人。

俺達は俺を除き四人。

その内、柊は戦えない。

まあ、あいつ等なら勝てるっしょ。

「ご主人様の仇……とらせてもらいます！」

「俺様生きてるよ!？」

もうお前死んだってことでいいよ。

「さーて、殺りあおうじゃないか勇者」

「殺されるのはお前らだけで十分だ」

バカが勇者の剣で俺に襲い掛かってくる。

「俺は得物を持ってないぞー」

「ふんっ、そんなの知るか！」

バカは剣を真下に振り下ろす。

「お前は卑怯者か？」

「卑怯者だあ？ 俺様は勝てれば何でもいい！」

「俺はその考えだけは嫌いじゃねえぜ！」

俺はバカの剣をかわしながら会話をする。

「だから、俺は正々堂々と卑怯な技でお前を倒してやるよ」

「俺様を倒す？ 寝言は寝てから言え！ まあ、お前は一生目を覚まさないがな！」

「そー、じゃあ『無理あきらめろ無力』」

俺はバカの武器に過負荷スキルを使った。

武器は戦うために作られた。

だったら武器が諦めたら？

「そんな物で俺を殺そうなんて冗談も程々にな
「なっ！」

俺は自分の拳で勇者の剣を壊す。

「勇者を名乗るバカに俺が負けるわけないだろ？ この世界はヒーローショーじゃないんだ。お前が本物の勇者で俺は偽者だったとしても。正義が本物が勝つとは限らないんだよ」

俺は右拳に力を込める。

「『嘘つき道化師』」

バカは壁を突っ切って飛んでった。

「武器を持たない貴方がたが本物も勇者のパーティーに勝てると思ってるんですか！」

ミランは相手の剣を避ける。

「私は勇者の仲間ではありません。桜島幸路様の仲間です。そこらの勇者と一緒にしないでください。『幻影夜桜』」

「なっ！」

幻影夜桜。

自分の武器を桜の花弁と化せ、その花弁を自由自在に操れる技。

「な、何だその桜は！」

残念ながらミランは武器を持ってきてではない。

だから幸路とバカとの戦いで散らばってるガラスを桜と化せ。それを武器とした。

「では、幸路様のために倒させてもらいます」

「んで、君が俺の相手かな？ 結構顔がタイプだけど。諦めてくれない？」

「残念だから、ボクは君はタイプじゃないや。ボクと肩を並べたいなら幸路みたいになるんだね」

「それじゃ俺には無理だ。ってことで力づくで物にする」
相手が剣を構える。

「『炎弾』！」

相手の炎弾が飛んでくる。

エミがそれをギリギリで避けた。

「隙アリ！」

相手がエミの隙を狙い剣を振るう。

「誰が隙があるのかな？『加速』！」

「加速で相手から距離を置く。」

「『雷纏』！」

エミはそこらへんに落ちているものに雷を纏わせ相手に投げた。

「ぐっ！」

あまりの速さについていけず相手が傷を負う。

その隙を逃がさないようにエミが畳み掛けるように攻撃をする。

加速プラス雷の攻撃でエミは相手に余裕を持たせない。

休むことのない攻撃の連鎖。

「さあ、休めるよ思わないでね」

「あんた等何も持っていないじゃん。それであたし達に勝とうとしてんの？　そもそも偽者とか、よく勇者を名乗ろうとしたね？　もしかしてお前等バカ？」

「まあ、お前は黙ってて。僕が殺るから」

「ハア！？　テメエふざけた事言ってるじゃねえぞ！　クソガキ！」

「そう熱くなるな。うざりたい」

「なっ！？　この……クソガキ！」

セイと柊の前で口論する相手。

セイはポカーンって口を開けてる。

柊は「……五月蠅い」と呟いている。

「ふんっ、まあいいわ。とりあえず速く殺そうか」

「だな。お前と口論するだけ時間の無駄だ」

「お前は後でゆっくり殺してやるよ」

「殺せるならな」

「そうか……じゃあ！」

相手の女がちょっとした加速呪文でセイに近づく。

「その首貰った」

女の大鎌がセイの首を狙う。

「……私を忘れるな」

「ありゃ？」

たしかに鎌はセイの首を刈っていたはず。

「……セイ大丈夫？」

「え？ ええ、大丈夫です……。それで何をしたんですか？」

「……ただのガード魔法」

柊が練習した魔法は補強魔法などの援助魔法だ。

因みに今使ったのは『ガード』。

壁みたいなやつで物理・魔法を防げる魔法。

「……私はセイを守る。だからセイは戦って」

「は、はいっ！」

「さっきの言葉を借りるけど。僕を忘れるな」

敵の男が弓を構えてる。

「では、バイバイ」

炎の矢が力強く飛ぶ。

「つておい！ あたしにも当たるだろうが！」

「チッ！」

「狙ったな！？ お前あたしを狙ったな！？」

「……大丈夫？」

「ええ、柊さんの防御で助かりました。ありがとうございます」

「……いえいえ」

チームワークがなっていない二人、チームワークがなっている二人。

対照的なチームの戦い。

「……じゃあ、そろそろお願い」

「は、はいです。『氷華』」

「し、しまった！」

「……先輩への侮辱は許さない」

「同感です！」

「…………じゃあ、殺ろうか」

「んで、勇者の仲間を倒したのか？」
「はい」

俺達の隣では勇者の仲間がのびてる。
ちなみに勇者は俺がぶつとばした。

「そーか、んじゃ。この城を燃やそう」
「もう立ち上がれないようにですか？」

「ああ、もう立ち上がれないようにこの城を破壊する。セイ、頼まれてくれるか？」

「は、はい！」

火炎系の魔法でいいだろう。

「それじゃかえろー」

「…………おおー！…………」

よし、帰ろうか…………な。

「どうやって帰ろう…………」

「…………あ…………」

帰り道なんて分からない。

まあ、勇者がいたら分かるだろうけど。

「ミラン。この場所分かる？」

「い、いえ…………」

迷子かな？

しかもあたりに人はいない。

「ま、まあ、とりあえず人を探そ？」

前向きな案を出した工ミに賛成。

「じゃあ、人をさがそー」
「「「「お、おー」」」」

三時間後街に出て帰り道が分かりました。

砂漠から決められた一粒を探すなんて無理でしょう

「ハア！？ 人探し！？」

「そうじゃ」

王様の城へ連れてこられた俺に頼まれたのは人探しだった。

「何で俺が！」

「その人はワシの友達の花さんなんじゃ。それでじゃ、その娘はこの城に遊びに来ようとしたのじゃが、来る前に行方不明になったのじゃ」

「あー、それじゃあ今頃は死んでるかもね、合掌……」

「縁起の悪いことを言うてない！」

「すまんすまん。でも王様の友達っつーことはどっかの国の王様？」

「まあ、そんなところじゃ」

「それじゃあ、そのお嬢様には護衛がついてたはずだよな？」

「ああ、護衛はついてたはずじゃ」

「合掌……」

「やめい！」

そろそろ飽きてきたので本気で答えることにしよう。

「んで、街にいるのか、外にいるのか分からん娘を俺達に探せと」

「そうじゃ、やつとは数十年の仲なのでう、だから頼む……」

そんなに頭をさげられたらな……断れないだろう。

「ああ、分かった。それでそのお嬢さんには特徴はあるのか？」

「特徴かのう……たぶん胸のところに龍の紋章が入ってるバッジがあるはずじゃ」

おいおい……そんな小さい物かよ……。

「ま、まあ、頑張ってみるさ」

「と言ったものの……どうすればいいんだ!」

「ど、どうしたんですか!？」

「それがな……」

セイに王様に言われたことを言ってみた。

「そ、それは大変ですね……」

「何か人探しつばいの役に立つ魔法ってないか？」

「え、まあ、あると思います……」

「流石! 最強!」

「さ、最強じゃないです! それに私だって苦手な魔法ありますよ」

「そっなのか？」

「え、ええ、回復魔法とか補強魔法は苦手ですね。一応使えることには使えますが……」

「ほー、まあ、使えることには使えるんだろ? いいじゃん。それでその魔法って何だ？」

それでも“最強”の称号を持つだけある。

んで、お嬢様を見つける魔法は何かなく?

「『検索』なんてどうですか？」

「おお! それで探せるな!」

万事解決!

何でも『検索』は相手の位置や弱点を探ることができるらしい。

「それで龍の紋章が入った女性ですね……」

「ああ……」

『検索』を使ったセイは無言になった。

それにしても護衛があつたのに……。

とんでもなく強いモンスターに襲われた……。

それが……。

「いました!」

「どこだ!」

「い、今、魔方陣に映しますね」
足元に魔方陣が現れた。

そこにはこの街の地図が描かれてた。
ん……街？

「こ、ここは……街ですよ？」

「ああ、モンスターに襲われたってことはないな」
それじゃ……もしかしてだが……。

「とりあえずここに行ってみるか」

「は、はい！」

城を出て十分ぐらい歩き目的地に着いた。

「結構近いな……」

「え、ええ……」

そこは街の裏路地。

人はまったく近寄らない場所だ。

「怪しい……よな？」

「あ、怪しいです……ね」

たぶんこの扉を開け入っていけば見つけれられるんだろうけど……。

「俺こういう場所苦手だわ……」

近づいたこともないし……。

「じゃ、じゃあ入るぞ……」

「は、はい……」

セイは怖いのか俺の腕につかまる。

扉を開けた先の空間はさっきまでと違う雰囲気放ってる。

「……セイ、どこにいるか分かるか」

「……ちよつと待ってくださいね」

周りは暗い。

隣にいるセイも見ることができない。

「……ちよつと前へ進み、次の道を右です」

「……ああ」

身長に前へ進む。

すると次は明るいところへ出た。

「……そういうことね」

「??」

俺の勘は当たってたわけだ。

俺の目に映ったのは無数の男たち。

手には酒。

テーブルにも酒。

鎧には龍の紋章が入ってる。

しかもその龍にはバツが書かれてる。

「国の反乱軍ってことか。お嬢様を誘拐したのも理解だ」

「は、反乱ですか?!」

「おい、そこのお兄ちゃんとお嬢ちゃん、お前等はこっち側の人間か？」

「んー、俺か？ 俺は」

「

セイにアイコンタクトを送り、話を続ける。

「あっち側過負荷だ」

剣に槍にメイス。

それぞれが自分の武器を構える。

「死ねえ！」

剣をおもいつき振り下ろす。

「それが護衛の剣術か？ 笑わせてくれるな……よ！」

俺も自分の剣をとる。

そして相手の剣を弾き飛ばす。

「さあ、楽しい宴を始めようじゃないか」

「い、いや……始めなくていいですよ」

「護衛の力を見くびるな！」

「いやいや、護衛って護衛してないじゃん」

俺はそれを鼻で笑い、相手の剣を避ける。

そしてよろけた相手の腹を蹴る。

「勇者を倒して名を上げたいバカはいないのか？」

「ゆ、勇者だと!？」

「アイツがか？」

「で、でもああいう少年だと俺は聞いてるぞ」

「んなことどうでもいいんだよ！俺がアイツを殺す！」

はいはい、頑張って殺してね。

「まあ、その前に直進以外のことを覚えような」

俺は簡単にその一撃を避け背後に回り背中を斬った。

「勇者様がお前等に処刑をくだしてやるよ」

「うらあああああ！」

両手斧とでも言うのだろうか。

一人の男が大きな斧で俺を襲う。

「コイツだけだと思ふなよ！」

続いて俺も俺もというふうに攻撃をしてくる。

やべえ……流石に独りで大人数はきついか……。

「『氷華』」

氷の花が一人の男を凍らす。

そして感染するようにみんなも凍る。

「助かったぜ……ありがとう」

「い、いえ……」

「さあ、セイ。お嬢様はどちらかな？」

「それでお嬢様を人質に戦争をすれば……」

「俺等でも勝てるかもしれんな……」

「反乱軍も大勢になってきたし、あの国をぶっ壊してやる」

「それじゃあ明日にでも……」

「（コンコンツ）」

「ん？ 何だ？」

「失礼しまーす」

「……し、します」

「何だ貴様等。敵か？ それとも同士か？」

「えーと、敵でも同士でもないです。ただお嬢様を救出しに来ただけですから」

「敵か！」

「いえ、反乱とか俺興味ないですから。貴方達を殺すつもりはないです」

でもさっきいたやつらは殺しちゃったけどね。

「で、お嬢様はどこですか？」

「知りたかったら俺等を倒してからにするんだな！」

部屋の中にいたお偉いさんたちが一斉に杖を手取る。

「セイ、お前に任せるぜ」

「は、はいつ！」

飛んでくる魔法。

セイはそれを自分の魔法で相殺した。

「相手は一人じゃないんだよ！」

波動銃の波動で相手を壁に押し付ける。

「さあ、吐け。お嬢様はどこだ？ 頭の風通しがよくなるぜ？」

「あ、あっちの部屋だ……」

男は指をビクつかせ隣の部屋を指す。

「あんがとよ。じゃあ、セイ頼む」

「わ、分かりました」

セイには予め『こいつ等は眠らせとけ』と言っておいた。

「んで、この腕と足に拘束具がついてるのがお嬢様かな？」

ちなみに目隠しもされてます。

「そ、そうだと思いますよ？」

「そっか、セイって『解除』の魔法も出来るよね？」

「ま、まあ、人並みには……」

そう言っただけでセイは簡単に拘束具を取ってしまった。

絶対コイツは人並み以上だ。

「さあ、お嬢様起きられるか？」

目を見開き俺達を見ているお嬢様。

ん？ 何か俺達変か？

「私を殺すんですね……」

「？ 勘違いしてる？ 俺はアクアの王様の頼みで来たんだよ『友達』の娘を探してくれ」ってな

「おじ様の？」

「ああ、そんで俺はこの世界の勇者をやらせてもらってます」

「わ、私はそのパーティーです……」

簡単に自己紹介をしたら、お嬢様の目の色が変わった。

絶望してた目から尊敬する相手を見るようなそんな目になっちゃった。

「貴方が勇者様ですか！ お会いできて光栄です。私はレイシアっていいです」

「あー、かしこまらなくていいよ。それに俺は勇者っていう感じじゃないし」

国民のため！ とか。

勇者として！ とか。

そんな理由で魔王と戦ってないし。

「でも魔王を二体も倒したのでしょう！ 凄いですよー！」

興奮を抑えようとするが抑えられないお嬢様。

そんなに勇者って凄いのか？

「ま、まあ、落ち着け。俺のことはいいから、ちょっと質問していいか？」

「え？ あ、はい」

「レイシア、お前の国で何が起こってる？」

反乱軍……。

「つーことは政治が上手くいっていないってところかな？」

それで国民に不満が積もり。

反乱を企てる兵も現れる。

「いえ……何も起きていません」

「起きていない？」

コイツは嘘をついてるのか？

でも嘘をついてるような表情じゃない。

俺は嘘をつくのだけじゃなくて、嘘を見破るのも得意だ。

だから俺から見てレイシアは嘘をついてない。

「どうということなんだ、レイシア」

「兵士内での噂です……」

噂……？

「『反乱に貢献した者は褒美をやる』。そんな手紙が来たらしいんです。その次の日、国の偉い人が一人殺されました……。その殺した人は褒美として沢山のお金と数々の武器と防具を貰った……。これを知った兵士はどうするでしょうね？」

まあ、結果としてでてるんだけど。

「今回、私がこちらへ来ようとした理由は、勇者様に会いたいのと逃げるためなのです……」

最後のほうは涙目で語っていたレイシア。

「お父様が……逃げろって……」

自分の命より娘の命を助ける。

良い父親だ。

「だからお願いします！ お父様を助けてください！」

ゴツンッ！ とおでこを地面につけるレイシア。

レイシアは土下座をして頼む。

昔の俺では味わえなかった感情がこみ上げる。

「……セイ。俺の言いたいこと、分かってるよな？」

「もちろんですよ」

走って外へ行くセイ。

「さあ、レイシア。顔を上げて」

「で、では！」

「ああ、俺達はレイシアの父親を助けるために反乱軍と戦ってやる」
流石に土下座なんかされちゃね……。

それに土下座なんかされなくても引き受けたのに。

「一人で歩けるか？」

「ええ、私も弱音を吐いてられないので」

さあ、明日は戦争だ。

狂われ狂って乱闘

「反乱じゃと！」

「ああ、明日レイシアの国を攻めるらしい」

「なに！？」

「んで、俺等は反乱軍と戦う。おーけー？」

「うむう……でもお主等は対魔王のパーティー……」

「俺に人探しをさせたのは誰だっけ？」

「ぐぬう……分かった……ではワシからも頼む。我が友を守ってくれ」

「ああ、頼まれなくても守ってみせる」

俺は頭を下げた王様を背後に歩き始める。

「さあ！ 反乱だ！ 戦争だ！ 乱闘だ！」

「ドンドン！ パパパフ！」

「相手は反乱軍！ 容赦はするな！ 冷徹の心を持て！」

「了解であります！」

「……（何なんだこの二人……）……」

ん？ 女性陣から心の声が聞こえた気がしたが……まあ、追求しない。

「まあ、冗談は置いておいてだな。今回のメインはレイシアの父親を守ることだ。忘れるなよ？」

「もちろん」

「了解です」

「わ、分かりましたです」

「……了解」

「大雑把な作戦だが……俺・ミラン・セイで前線で反乱軍と戦う。エミと柊とレイ（レイシア）は後ろで王様を守ってくれ」

「ええー！ ボクが守るのー？」

「ああ、頼む」

「んー、まあ、いつか。一応戦えるし」

「……私は賛成だけど。レイシアって戦えるの？」

「前は武器を持ってないアンド不意打ちで反乱軍に捕まったけど。アイツは強いらしいぞ」

俺もさっき知ったけど。

だっていきなり。

『明日は私もついて行きます。一応私は強いですよ？』
って言われた。

「それじゃ、頼むな」

『全軍突撃だ！』

『『『おおー！！！！』』』

反乱軍が突撃を開始した。

「さあ、戦うぞ。一人たりとも城にいれるな。ネズミを駆除するんだと思え」

「そうするとボクが戦えませーん」

「……私はネズミが苦手です」

「その二人は黙れ」

まあ、今の状況で冗談を言ってくれるのは嬉しい。そのお陰でセイとミランとレイの緊張が解された。

「あー、最後に言っておくが。死ぬなよ？」

「だーれに言ってるのさ」

「幸路様を置いて死ぬませんよ」

「ええ、私も久しぶりに狂ってみます。久しぶりなので……加減は出来ないかもしれません」

「で、でも私は……」

「そんなじゃ、決定」

「私は……」

「それじゃ、行こうか」

「私も狂います！」

「よくぞ言ったセイ」

「共に行きましょうか」

「はい！」

思う存分狂ってやるよ。

相手が引くくらいに。

自分が引くくらいに。

血で染まった狂気に浸りながら。

非常に愉快に、非情に狂おしく。

この反乱軍を倒す。

「オラっ！」

大きな斧を振り下ろす。

そんな真正面からの攻撃は避けてくださいと言っているようなもので。

「簡単に避けられる」

「なっ!?!」

背中を斬る。

怯んで相手は避けられないので、その一撃が背中にあたる。そして倒れる。

「さあ、次来い。どうせだったら全員で来てもいいんだぜ」

「調子こくなや！」

横へ振られた剣。

俺はそれを剣で防ぐ。

「『炎弾』！」

至近距離で放った炎弾は避けることが出来ず直撃。

「『火炎屏風』！」

周りのやつ等は俺の炎で燃やされる。

「おいおい、これでも国の兵だったやつか」

そして一呼吸置き話す。

「暴れたりないんだよお！」

「ぐへへ、その姉ちゃん可愛いじゃないの。今なら見逃すよ？だから俺達の軍にこない？」

見るからに雑魚キヤラみたいな人が私に話しかける。

「ねえってば」

その男は私の肩を掴んだ。

「うああ！」

その瞬間に男が叫ぶ。

もちろんだ、私の肩を触れてた自分の腕が斬れているのだから。

「私に触れないでください。触れていいのは私が認めた仲間だけです」

「クソオ！ このアマ！」

斬られた反対の手で剣を持ち私に突っ込む。

私はその剣を弾き飛ばし、怯んでる相手を斬る。

「私に触れた罪、その体で払ってもらいます」

私は普段言わないようなことを言う。

何でって？ 私は今最高に狂ってるんですから。

「『幻影夜桜』」

私の炎の剣が桜の花弁と化す。

「『火桜』」

花弁が炎と化し、相手を襲う。

幻影夜桜の能力。

花弁と化した物の性質を扱うことが出来る。

だからこの場合、炎の剣を桜の花弁にした。

だから炎を扱える。

炎の柱が何本も現れる。

前に戦った勇者のパーティーと戦ったとき使った、幻影よりもっとリアルな。

炎の柱。

それにビククリしている反乱軍に言う。

「貴方等が抱いてる幻想を私がぶった切ってやりますよ」

「お嬢ちゃん、ちゃんと戦えるのかな？」

「た、戦えます！」

私は反論した。

でも聞く耳持たずなのか、私を無視して話を進める。

「お譲ちゃんのお仲間さんが好き勝手やってくれてるから、僕も手加減しないよ！」

不意を衝こうとしたのか、話し終わると同時に攻撃を仕掛けてきた。

振り下ろされた剣は私の頭上で止まる。

「ひよ、『氷凍』です」

相手は凍り動けない。

氷華は地面を凍らせる技。

一応相手の腕を凍らせることは可能だけど。

私の動きじゃ触れられないので『氷凍』で空気を凍らせ。相手の腕凍らせた。

「『氷華』と『花花弁です！』」

辺り一面に咲く氷の花。

その花弁が沢山の人数の敵に刺さる。

あ、そういえば……狂うんでしたね。

では……。

「『氷狼』です！」

三体の氷の狼。

そして三体の氷の狼が相手に噛み付く。

もちろん相手は行動出来ない。

「『氷鉄砲』」

鋭く尖った氷の弾が相手の中心を貫く。

「久しぶり本気を出させてもらいますね」

前・後ろ・右・左。

色々な方向から来る攻撃。

俺は波動銃を構える。

「（ガンッ）！」

俺が放った波動は相手の武器にあたる。

強い衝撃なので全員が武器を離れた。

「ばいばい」

連続で剣で斬る。

「結構少ないな。んにしても、あつちは何だ？

騒がしいし。どん

な魔法を使ってるんだ、セイは……」

それにミランのほうも炎が上がってる。

相手が炎を使っただんじやないよね？

「まあ、俺が出来ることをするしかないか」

俺はまた目の前の敵に専念することにした。

「うらあああああああ！」

「やっど、ボクの出番？ つまんないよ。だからボクを楽しませてよ」

みんなの防御は完璧だ。

だからここにいるのは最初から城にいた人物。

つまり反乱者。

「ボクは王様の所に行くよ」

「行かせねえよ！」

「死ね！」

ボクを行かせないために二人がかりで道を防ぐ。

「『加速』」

ボクは相手にいつきに近づき。

殺した。

「ここは二人に任せたよ」

「……任せれた」

「お父様を頼みます……」

「任せてね」

ボクは『加速』し、王様の元に行く。

「『紋章』」

私、レイシアは紋章を発動させた。

『紋章』は私の家の人だけが使える異術。

「『全向上』」

紋章を自分の力・体力・治癒能力の能力を向上させた。

そして紋章を自分の剣に纏わせる。

「『纏紋章波』！」

纏わせた紋章の力を相手に放つ。
相手は避ける術がなく吹っ飛ぶ。

「ここだけは死守させてもらいます！」

私は目の前に紋章を展開した。

「『紋章・炎龍』！」

目の前の紋章から炎の龍が飛び出す。
その龍は相手を一掃し消える。

「お嬢は黙ってる！」

一人の男が私の死角から現れる。

ああ、私死ぬの？

さようならお父様……。

私は貴方を守れないで死ぬようです……。

「……そんなの私が許さない」

薄い膜が私を守る。

これは舞華ちゃんの『バリア』？

「……大丈夫？」

「え、ええ、ありがとうございます」

「……ここは私に任せて。お父さんが気になるのでしょうか？」

気になると言えば気になりますね……。

「……先輩だったらこう言いますよ。『自分の親ぐらい、自分で守れ』」

「ですね。では、お先に行きます！」

私は舞華ちゃんは後ろに走る。

覚悟を決めたように目つきを変える。

「私の邪魔をするやつ等は！ どけろおおおおおおお！！」

勝つために想像した、だから勝つために妄想するわ

……困った困った。

私独りしかないじゃん。

……私は補強専門なのにさ。

……でも、あれでよかったかな？

「死ね！」

私を襲う反乱軍。

「『全方位防御』」

「貫け！」

周りから弓の一斉射出。

とりあえずこれらの攻撃を防御するのは難しくない。

でも私には勝つための魔法がない。

守るための魔法はあるけど。

「そんな薄い壁、俺が粉々にしてやるよ！」

男は大きなハンマーを大きく振りかぶり、バリアに当てる。

そんな簡単には壊れないだろう……。

だけど、私のバリアは破壊されてしまった。

普通の兵より強いやつか……。

「おいおい、これだけか？ つまらんな、おい！」

ハンマーで地面を叩く。

そして地割れがおきる。

私はバリアを足場にし移動。

「これなんてどうだ！」

相手がハンマーを思いつきり振る。

それが？

「（ドワァァアン）！！」

私の隣を空気を通り抜ける。

ハンマーで風を飛ばした？

「次は当てるぜ！」

！？ また来る。

そして相手はまたハンマーを振る。

「……『バリア』」

私は風が見えないので全体にバリアを張った。

「そんな紙切れ同然のバリアで俺の攻撃が防げると思ったか！」

私の目の前のバリアが割れる音がした。

そして割れる音がしたと同時に私に強烈な風が当たる。

「……ぐっ！」

痛い……。

「これぐらいで壊れたのか？ お譲ちゃん」

回復系は得意だけどアイツを倒す術がない。

「そんじゃ、王手だ」
チェックメイト

あー、死ぬの？

ここで私は死ぬの？

小学生の頃。

絵を描いたりするのが好きだった私は賞状を月に何枚も貰っていた。

中学生の頃。

物語を作るが好きだった私は小説や漫画を書いて賞とかとっていた。

現在は……。

とある事件によりそれらの才能を封印してた。

それでも私は十三組に入学してしまった。

私には先輩のようにスキルがない。

だから私はこの状況を覆すような奇跡は起こせない。

起こせるとしたら封印を解くことかな。

それでまた先輩の隣に立っていられるのなら。

私は……。

「私は才能を使う！」

私は拳を握り締め立ち上がった。
ん？ 違和感がある……。

「……何これ？」

私が握っているのはペン。

……何をすれと？

絵を描けと？

文字を書けと？

「……じゃあ、書いてあげる」

とりあえず武器になりそうな字……『剣』？

私は地面に『剣』と書いた。

そして私の目の前に一つの剣が突き刺さる。

「……これが私のスキル？」

リアルビクチャー
妄想現実。

「剣を持ったところでどうした！ 小娘！」

『銃』

私は相手と距離を置き。

銃を放つ。

「ぬう！？」

私はさっきまで銃も持っていなかったので、相手は怯み、銃弾にあたった。

「やりやがったな！ 小娘！」

男はまた地割れをおこした。

「くらえ！」

そして風が飛んでくる。

『風』

そして私も風で対抗する。

「その程度の風で俺が負けるわけなかるう！」

そんなの分かってるだから、風をぶつけ威力を抑え、バリアで守る。

それならば私のところまで風はこない。

「……私が描く物語には貴方は必要ない」

相手の心臓に私が持っていた剣を刺す。

書いた物を具現化するスキル。

それが私のスキル。

リアルビクチャ
妄想現実……。

スキルゲットして嬉しすぎてニヤニヤしちゃうね。

「……さあ、私も戦おうかな」

私はいつになく強気で行く。

勝つために想像した、だから勝つために妄想するわ（後書き）

やっと新作ができましたよ！

他にも書くべきものがあるのに……

それは置いといて

結構自信作で

結構自分勝手な作品になりました

それでもよかったです見てください

仕方が無い諦めたよ

俺は反乱軍に突っ込む。

「『炎弾』！」

炎弾で敵を吹っ飛ばす。

吹っ飛ばなかった敵を剣で次々と斬っていく。

「オラァ！」

男が剣を振り下ろしてくる。

剣と剣をぶつけ威力を相殺する。

だけど流石元国の兵。

一般人の高校生では相手にならん。

だから反則チートを使わせてもらいますぜ。

「『無理無力あきいりむち』」

すると相手の武器が壊れる。

相手はそんなこと予想していなかったのか、油断して俺に斬られた。

「隙あり！」

グサッ！

俺の体に剣が刺さった。

だが……。

「はははは！！ 勇者を討ち取ったぞ！」

「あー、そうなの」

「えっ？」

パチンッ。

俺が指パッチンをする。

「な、なんで……だ」

俺に刺さっていた剣は違つ男の心臓を刺してた。

「『嘘つき道化師』」

お前が見ていたのは俺で。

お前が指したのはお前の仲間だ。
僕は何も悪くない。

「くられ！」

男がメイスで殴ってくる。

「ノロいノロい」

俺はそれを楽に避けた。

そして銃で頭を打ち抜く。

「おいおい、そこで見ただけかあ？　なあ、反乱軍のリーダー格エルア」

「その名をどこで聞いた？　勇者よ」

「風の噂でね」

大きな剣を横に座っている奴が俺の前にいる。

名はエルア。

反乱軍のリーダー格。

「お前を殺せば終わるんだが……いいか？」

「何を言っている勇者よ。我がたかが青年に負けるわけないだろう
エルアは椅子から立ち上がり剣をとる。

「我にケンカを売ったことを悔いよ」

「悔いるよ。お前は強い。だから俺は悔いるよ」

俺はリングから剣を召喚し、剣を力強く握る。

「自分の弱さに！」

それを言い放つと二人は同時に走り出す。

「そうか……仕方ない。“龍よ我に力を”」

“龍よ我に力を”？　何だそれ？

俺は考えるのを止め思いつきり手に力をいれる。

「オラア！」

俺は剣をおもいつきりエルアに振り下ろす。

「いい太刀筋だ……だが」

大剣で受け止めたエルアはそのまま俺の剣を弾き飛ばした。

「しまっ！」

「これが力の差だ！」

エルアは大剣で俺を真っ二つに切り裂く。

綺麗に真っ二つ。

真っ赤の血は飛び散らずに真っ二つ。

まるで……絵みたいに。

「『嘘つき道化師』」

斬られた俺は偽者だ。
フェイク

「『炎弾』！」

沢山の魔力を込めた炎弾を放った。

「ぬう！？ でもこれしき！」

エルアはマントを盾にした。

……ハア？ 盾に？

「炎弾を打ち消した……？」

「ああ、このマントは特別製でね。ある程度の異能力なら打ち消せる」

ふーん、納得納得。

「これは、面白いマジックを見せてくれたお礼だ！」

エルアは大剣を投げた。

「『剣雨』」

上から剣の雨が降ってくる。

俺は走ってそれを避けようとする。

「残念ながらそれは追尾するぞ」
だね。

解説しなくても分かるよ。

だって現に俺剣に追いかけてるから。

んじゃ。

『嘘つき道化師』。

声に出さず呟く。

剣の雨は俺を避けるように地面に刺さる。

ターゲット
目標を俺ではなく地面に設定した。

いや、嘘をついた。

「これだけ……」

これだけか？ と呟こうとした俺の視界に入っただのはエルアの腕だった。

「遅い！」

エルアは俺の頭を掴み宙に上げた。

俺は抵抗することが出来ず宙でもがいてる。

「勇者と言っても所詮少年だ。俺に勝てなくても悔しがらなくてもいい。それが当たり前なのだからな」

あー、俺死ぬの？

死ぬんだったら、遺書でも書いとけばよかったかな？

つてか俺、過負荷マイナスなんだし。

勝てるわけないか。

んー、まー。

最後に足掻きましょうか。

「『無理無力』諦める」

大剣は俺に落ちる直前粉々に折れた。

「ふん、お前のまか不思議な力のことは聞いている。予想はできてる

……だからこれで最後だ！ 『土拳』」

大きな土の拳を構えるエルア。

あー、あの拳を消すのは無理かな？

『嘘つき道化師』は今日はもう無理。

使いすぎた。

それじゃ……奇跡を待つしかないかな。

体力も限界だし……。

やる気も失せてきたし……。

もう死んでもいいかなー……。

「『無理無力』諦めたよ」

俺は重力に抵抗できず地面に落ちていく。

「もらった！」

俺の視界に映る土。

「何がもらったの？」

そこには土拳を喰らったはずの俺がいた。

「また何かの能力か……」

「あー、まあな。その能力の裏技かな？」

『無理無力』を自分にかけた。

心を凄くマイナスにして『無理無力』で一気にプラスにする、俺の裏技。

「さあ、来いよ。エルア」

「ああ、行かせてもらう！」

土の大剣を持って走ってくるエルア。

速い……だが。

「今の俺の敵ではないな」

エルアの剣が俺のすぐ近くまできた。

それじゃ……反撃返し。

「超至近距離！ 『無数業火弾』！」

文字通り至近距離で炎弾の強化版、業火弾を撃った。

エルアはマントで防ごうとするが遅い。

「くっ！」

流れは止めない！

「『火炎屏風』！」

周りを炎で壁で覆う。

逃がさない！

リングから銃を一瞬で召喚する。

「オラアオラアオラア！」

何発の何発も撃ちまくる。

エルアに当たっているかいないかも確認せず。

「止めだ……『ファイヤーキャノン』」

俺の炎の魔法を銃に込める。

残り20%……。

……。

完了。

「焼き払え！」

二丁の銃から一直線に炎の弾が放射される。
そして戦いは終わりの幕を閉じた。

仕方が無い諦めたよ（後書き）

「主人公（ry）」のところで書いたけど
来年があなた達にとって幸せになることを祈ります

……リア充はばく……なんでもありません
ま、来年も紅の雲雀をよろしく！

というか新作の「主人公による主人公のための主人公」をよろしく！
宣伝乙ってことで
良いお年を！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8213u/>

勇者ですか？ いいえ、過負荷です

2011年12月31日16時56分発行